

熊本大学埋蔵文化財調査室年報 2

—1995年度—



1995

熊本大学埋蔵文化財調査室

熊本大学埋蔵文化財調査室年報 2

—1995年度—

1995

熊本大学埋蔵文化財調査室

序 文

埋蔵文化財調査委員会
委員長 北野 隆

現在、熊本大学では各学部で、将来構想に沿った再開発が行われています。
熊本大学の各学部が位置する地域が「埋蔵文化財包蔵地」に指定されているか
らです。

本年度は、黒髪南（工学部）地区で「工学部研究実験棟」、天草前島（理学部）
地区で「理学部附属臨海実験所」、本荘南（医学部）地区で「医学部R I 総合セ
ンター遺伝子実験施設」など29件の発掘調査が行われました。

黒髪南（工学部）地区では、古代の集落地、天草前島（理学部）地区では、
従来貝塚と思われていた所が縄文時代早期の生活址であることがわかり、本荘
南（医学部）地区では、古墳時代後期から古代にかけての遺構が検出されま
した。

この『熊本大学埋蔵文化財調査室年報 2』が熊本県の考古学・歴史学など
各分野に活用されますことを期待しまして、本年度の報告を致します。

1996年3月

例　　言

1. 本書は熊本大学構内において、1995年4月1日から1996年3月31日まで行われた埋蔵文化財の調査および熊本大学埋蔵文化財調査室の活動内容に関する年次報告書である。
2. 権内遺跡の調査は、本年度より年次と調査順を表す調査番号で表すこととし、出土遺物や記録類もこの番号で整理・管理している。
3. 遺跡略号は、地区ごとにローマ字2～3文字で以下のように表記した。黒髪町遺跡黒髪南地区（KKS）、向北地区（KKN）、前島遺跡（MJ）、本荘遺跡医学部構内（HJM）。
4. 遺物への注記は、遺跡略号+調査番号+出土位置の順で行った。
5. 本書で紹介した出土遺物や記録類は熊本大学埋蔵文化財調査室に保管している。
6. 本書で使用した遺構実測図は小畠弘己をはじめとする調査参加者が、遺物実測図は小畠と本田浩二郎、飯田考俊、大坪志子が作成した。製図は小畠と本田が行った。
7. 本書の整理には、上記以外に今村佳子、岩谷史記、矢野希久代、松浦一之介が参加した。
8. 石材の鑑定は、熊本市教育委員会文化課植津暢洋氏に御願いした。
9. 本書の執筆は、1～4章を小畠、5章を甲元眞之室長、付篇ならびに抄録を矢野が分担した。
10. 本書の編集は、甲元眞之室長指導のもと小畠が行った。

熊本大学埋蔵文化財調査室年報 2

本文目次

第1章 本年度の調査概要	1
第2章 黒髪南地区的調査	3
1. 遺跡の立地と周辺の遺跡	3
2. 調査地点と調査成果	3
工学部研究実験棟共同溝建設工事に伴う発掘調査 (9501)	3
工学部研究実験棟貯水池建設工事に伴う発掘調査 (9512)	6
工学部附属工学機器センター建或工事に伴う試掘調査 (9502)	9
工学部R I 研究実験棟建設工事に伴う試掘調査 (9503)	9
その他の調査	11
3.まとめ	11
第3章 合津地区的調査 (9509)	13
1. 調査に至る経緯	13
2. 遺跡の立地と周辺の遺跡	13
3. 前島遺跡の既往の調査と認識	15
4. 調査結果	18
1号出土遺物	18
2号検出の遺構と遺物	19
海岸跡跡採集の遺物	29
5.まとめ	31
第4章 本荘地区的調査 (9511)	33
1. 調査の経緯	33
2. 遺跡の立地	33
3. 調査結果	33
基本解説	33
検出遺構と出土遺物	36
その他の出土遺物	46
4.まとめ	50
第5章 版文	51
付 編 熊本大学構内埋蔵文化財保護対策要項	52
1. 熊本大学埋蔵文化財調査委員会規則	52
2. 熊本大学埋蔵文化財調査室要項	53
3. 1995年度熊本大学埋蔵文化財保護対策組織	54
報告書抄録	55

挿図目次

第1図 黒髪町遺跡・本庄遺跡の位置と周辺遺跡の分布図 (1/25000)	4
第2図 黒髪南地区における調査地点配置図 (1/2000)	5
第3図 9501・9512・9514・9516調査地点の遺構配置図 (1/200)	7
第4図 9501調査地点の土層断面実測図 (1/50)	8
第5図 9501調査地点第1号住居址実測図 (1/50)	8
第6図 9512調査地点第1号住居址実測図 (1/50)	8
第7図 9501調査地点第1号溝土層断面実測図 (1/50)	8
第8図 9501・9512調査地点包含層出土土器実測図 (1/3)	9
第9図 9502調査地点土層断面実測図 (1/50)	10

第10図	9503調査地点土壠断面実測図 (1/50)	10
第11図	9503調査地点トレント1平面実測図 (1/50)	10
第12図	9503調査地点集石遺構実測図 (1/20)	10
第13図	前島道路の位置と周辺遺跡の分布図 (1/25000)	14
第14図	前島道路調査区位置図 (1/1000)	16
第15図	I区土壠断面実測図 (1/50)	17
第16図	II区土壠断面実測図 (1/50)	17
第17図	III区泥貝土層(旧耕作土) 露出状況実測図 (1/200)	17
第18図	集石遺構実測図 (1/20)	19
第19図	種種別重量構成図	19
第20図	砾(砂岩A) 出土状況平面図 (1/100)	21
第21図	砾(砂岩B) 出土状況平面図 (1/100)	21
第22図	礫出土状況平面図 (1/100)	22
第23図	土器出土状況平面図(1) (1/100)	22
第24図	土器出土状況平面図(2) (1/100)	23
第25図	石器出土状況平面図 (1/100)	23
第26図	III区出土土器実測図 (1/3)	24
第27図	III区出土石器実測図(1) (2/3)	25
第28図	III区出土石器実測図(2) (2/3)	26
第29図	前島海岸遺跡出土土器実測図 (1/3)	29
第30図	前島海岸遺跡出土石器実測図 (2/3)	30
第31図	9511調査地点位置図 (1/2000)	34
第32図	9511調査地点遺構配置実測図 (1/200)	35
第33図	9511調査地点土壠断面図 (1/50)	37
第34図	溝土壠断面実測図 (1/50)	37
第35図	住居址実測図 (1/50)	39
第36図	包含層・各遺構出土の古墳～近代遺物実測図(1) (1/3)	40
第37図	包含層・各遺構出土の古墳～近代遺物実測図(2) (1/3)	41
第38図	住居址・方形整穴遺構実測図 (1/50)	42
第39図	包含層出土縄文土器実測図 (1/3)	47
第40図	包含層出土縄文時代石器実測図(1) (2/3)	48
第41図	包含層出土縄文時代石器実測図(2) (2/3)	49

写 真 目 次

写真1	9516調査地点(南より)	7
写真2	9512調査地点全景(西より)	7
写真3	9501調査地点全景(東より)	7
写真4	9501調査地点全景(北西より)	12
写真5	9501調査地点第1号溝土壠断面(西より)	12
写真6	9501調査地点第1号住居址(南より)	12
写真7	9512調査地点第1号住居址(北より)	12
写真8	9502調査地点トレント1土壠断面(西より)	12
写真9	9503調査地点トレント1土壠断面(西より)	12
写真10	9503調査地点トレント2土壠断面(西より)	12
写真11	9503調査地点集石遺構(北から)	12
写真12	1層出土各種貝	18
写真13	1層出土フジツボ	18
写真14	集石遺構	19
写真15	A-B-4-5区遺物出土状況(南東より)	20

写真16	石斧出土状況（南東より）	20
写真17	遺物出土状況（南東より）	20
写真18	縄出土状況（北より）	20
写真19	前島遺跡遠景（西より）	31
写真20	梅殿塚古墳（南より）	31
写真21	I区全景（東より）	32
写真22	I区土層断面（西より）	32
写真23	II区全景（北西より）	32
写真24	III区泥質土層検出状況（北より）	32
写真25	III区全景（東より）	32
写真26	III区全景（北より）	32
写真27	B-2-3区土層断面（南西より）	32
写真28	B-2区遺物出土状況（南西より）	32
写真29	調査区東部全景（西より）	34
写真30	調査区西部全景（北西より）	34
写真31	調査区南壁（西より）	37
写真32	土層断面（H-1-3区）（北西より）	37
写真33	第10号溝（東より）	43
写真34	第19号-55号溝切り合い状況（北東より）	43
写真35	第25-50-65号住居址（北西より）	43
写真36	第25号住居址と復土焼成土器（北西より）	43
写真37	第25号住居址発索土器詳細(1)（東より）	43
写真38	第25号住居址発索土器詳細(2)（東より）	43
写真39	第25号住居址壙と周囲の土器（南より）	43
写真40	第25号住居址壙（南より）	43
写真41	第25号住居址底出土状況（南より）	45
写真42	第5号住居址（西より）	45
写真43	第65号住居址（東より）	45
写真44	第7号住居址（南より）	45
写真45	第6号方形竪穴遺構（北より）	45
写真46	第16号方形竪穴遺構（南より）	45
写真47	第75号方形竪穴遺構（西より）	45
写真48	第85号掘立柱建物（西より）	45
写真49	第95号掘立柱建物（南東より）	46
写真50	調査風景（西より）	46
写真51	縄文土器出土状況（北より）	46
写真52	石皿・磨石出土状況（南より）	46
写真53	冠雪の現場（東南より）	50

表 目 次

第1表	1995年度熊本大学埋蔵文化財調査一覧	I・2
第2表	包含層出土土器一覧表	27
第3表	包含層出土石器一覧表	28

第1章 本年度の調査概要

本年度は、工学部研究実験棟関連の設備工事関連の立会調査をはじめとして、発掘調査5件、立会調査19件、試掘調査5件を実施した（第1表）。調査のほとんどは工学部の所在する黒髪南地区に集中しているが、新規的な要素として、天草郡松島町に所在する理学部臨海実験所実験研究棟改修工事（合津地区）に伴う発掘調査、医学部R1総合センター遺伝子実験施設建築工事（本荘地区）に伴う発掘調査などがある。合津地区に関しては、從来貝塚として認識されてきた遺跡の周辺部にあたり、貝層の存在が予想されていたが、その貝層が近代にもたらされた貝であり、本来の遺跡の性格が縄文時代早期の生活址であることが判明した。また、本荘地区においては、本庄遺跡（熊大病院敷地遺跡）の周辺部にあたり、試掘および本調査の結果、遺跡の範囲がさら南側に拡大することが明らかになった。また、これまで不明であった本遺跡の性格が古代を中心とした集落址であることが判明したことなどは、大きな成果といえよう。

No.	測量番号	調査地区(調査区)	工事内容	調査日程	調査内容	調査結果概要	出土遺物
1	9501	黒髪南(工学部)	工学部研究実験棟新館 I期共同建設	7.4.25 ～5/2	発掘調査	古代～江戸期の溝1条、 古代堅穴住居1基、柱穴 多数検出。	縄文後期土器片少 量、古代土器器・ 須恵器
2	9502	黒髪南(工学部)	工学部附属工事機器セ ンター新館	7.5/9 ～5/10	試掘調査	地表下2mの層まで、河 川氾濫の土砂が互層に堆 積。その下部に少量の遺 物を含む包含層を確認。 記録保存にて工事着工を 許可。	古代土器器・ 須恵器少量
3	9503	黒髪南(工学部)	工学部R1研究実験棟 建設及び基礎復原	7.5/15 ～5/16	試掘調査	地表下2.5mで古代遺物包 含層、その下より東石遺 構を検出。要立会調査と 判断。	古代土器器・ 須恵器
4	9504 ～06	黒髪南(工学部)	工学部研究実験棟新館 電気設備(1号2号)に 伴う配管埋設	7.5/29・30 6/21	立会調査	埋設管等により搅乱が多 く、また遺構面に達せず。	なし
5	9507	黒髪南(工学部)	工学部過橋監理校	7.8/21	立会調査	遺物包含層まで達せず。	なし
6	9508	黒髪南(事務局)	事務局前 外灯配線改修	7.8/22	立会調査	掘削深度50cmのため遺物 包含層まで達せず。	なし
7	9509	前島(理学部)	理学部附属臨 海実験所 実験研究棟 改修	7.9/8 ～10/12	発掘調査	縄文早期の押型文土器を 伴う時期の東石1基と遺 物を確認。從来の貝塚説 を否定した。	縄文早期土器、 石器・石斧等の 石器多数
8	9510	黒髪南(工学部)	工学部研究実験棟新館 I期に伴う土器配管	7.11/2	立会調査	古代遺物包含層及び東へ の落ち込みを確認。	古代土器片 少量
9	9511	本荘南(医学部)	医学部R1総合センター 遺伝子実験施設建設及 び構造切替工事	7.11/6 ～11/8	試掘調査	古代遺物包含層及び堅穴 住居址を確認。要本調査 と判断。	古代土器器・ 須恵器
10	9512	黒髪南(工学部)	工学部研究実験棟新館 I期に伴う排水管設置	7.11/13 ～11/16	発掘調査	古代堅穴住居址1基及び 柱穴7個検出。包含層及 び遺構より遺物出土。	縄文後期土器片、 古代土器器・須恵器
11	9513	黒髪南(工学部)	工学部研究実験棟新館 I期に伴う配管	7.11/17	立会調査	掘削深度が遺物包含層に 達せず。	なし

第1表 1995年度熊本大学埋蔵文化財調査一覧

第1章 本年度の調査概要

No.	測量番号	測量地区(測量区)	工事内容	調査日程	調査内容	調査結果概要	出土遺物
12	9514	黒髪南(工学部)	工学部研究実験棟新館 [1期に伴う外堀	7. 11/17	立会調査	後世擾乱により一部分を除いて遺物包含層はほとんど認められず。	古代土師器・須恵器数片
13	9503	黒髪南(工学部)	工学部R1研究実験棟 建設に伴う基礎掘削	7. 11/21 ~11/22	立会調査	集石周辺を精査したが、一部を除いて遺物包含層は残っていない。遺構は確認できず。	古代土師器・須恵器
14	9515	黒髪南(工学部)	工学部研究実験棟新館 [1期に伴う外堀	7. 11/22	立会調査	後世擾乱により、包含層はほとんど破壊されている。一部で1m下に包含層を確認。	古代土師器少量
15	9511	本荘南(医学部)	工学部R1研究実験棟 遺伝子実験施設建設	7. 11/24	立会調査	掘削深度が一部包含層に達するが、遺物・遺構とも検出できず。	なし
16	9516	黒髪南(工学部)	工学部研究実験棟新館 [1期に伴う外堀	7. 11/28 ~11/29	発掘調査	绳文～古代の遺物包含層が良好な状態で残る。方形の柱穴1個確認。	绳文土器片、古代土師器
17	9511	本荘南(医学部)	工学部R1研究実験棟 遺伝子実験施設建設 に伴う外堀切り替え	7. 12/1	立会調査	包含層を確認したが、掘削深度が包含層中に達せず。	なし
18	9517	本荘南(医学部)	医学部附属センター 遺伝子実験施設に伴う木移築	7. 12/4	立会調査	遺物・遺構ともに認められず。	なし
19	9518	黒髪南(工学部)	工学部R1研究実験棟 建設に伴う外堀工事	7. 12/5	立会調査	埋設管の擾乱のため、包含層は確認できず。	なし
20	9519	黒髪南(工学部)	工学部研究実験棟新館 [1期に伴うガス配管	7. 12/12 ~12/14	立会調査	基礎や埋設管の擾乱が多く、包含層はほぼ破壊されているが、一部に古代の柱穴1個と幅40cm、深さ20cmの溝を確認。	古代土師器・須恵器少量
21	9520	黒髪北(工学部)	教養部前道路 改良	7. 12/18	立会調査	掘削深度30～50cmで、遺物包含層は確認できず。	なし
22	9511	本荘南(医学部)	医学部附属センター 遺伝子実験施設建設	7. 12/25 ~8. 2/22	発掘調査	古代堅穴住居址5基、掘立柱建物2基、溝(濠)6条、道路状遺構1基、方形空穴遺構4基、土壤6基等を検出した。	绳文後～晚期 土器・石器・古代土師器・須恵器・鐵器 多数
23	9521	黒髪南(工学部)	工学部校舎 新館	8. 3/1	試掘調査	弥生中期の上層及びピットを確認。要本調査であると判断。	弥生中期土器 少量
24	9522	黒髪北(医学部)	第五高等学校記念庭園植栽工事	8. 3/8	立会調査	掘削深度は60cmで、明確遺構の確認はできなかつたが、良好な遺物包含層が存在すると判断。	古代土師器3点 現代遺物
25	9523	城東(教育学部)	教育学部附属幼稚園 水遊び場兼洗足い湯 登録客廳受け入れ	8. 3/21	立会調査	地表下80cmまで埋土・水成堆積を確認、掘削深度で包含層に達せず。	なし
26	9524	京町(教育学部)	教育学部附属小学校 給排水管取替工事	8. 3/25 ~3/26	立会調査	遺構確認できず。	なし
27	9525	本荘北(附属病院)	医学部校舎 新館	8. 3/29 (予定)	試掘調査		

第1表 1995年度熊本大学埋蔵文化財調査一覧

第2章 黒髪南地区の調査

1. 遺跡の立地と周辺の遺跡

本学の法学部・文学部・教育学部・教養部・工学部・理学部の所在する黒髪地区は、周知の黒髪町遺跡（熊本市埋蔵文化財地図No.8-88）内にある。本遺跡は、熊本平野北西部の立田山（標高151.6m）の南山麓の白川右岸に展開する河岸低位段丘（標高25～18m）にある。熊本平野南部は白川の運搬した土砂が扇状地帯に堆積した砂礫層を基盤としており、本遺跡は位置的にその扇状地の要部分に相当する。

周辺遺跡としては、背後の立田山裾に小峰遺跡、黒髪町下立田遺跡群、カブト山遺跡などが、白川を挟んだ対岸に、渡鹿貝塚・北原甕棺遺跡を擁する渡鹿遺跡群や新屋敷遺跡、大江遺跡群などがある（第1図）。

2. 調査地点と調査成果（第2図）

本年度に調査を実施した黒髪南地区は、この遺跡の南端にあたり、白川の侵食・堆積作用を受けやすい地点である。本年度の調査は、1994年度に実施した工学部研究実験棟関連の共同溝（調査番号9501）、貯水槽および排水溝建設（9512～9516）、ガス管埋設（9517）、高圧ケーブル埋設（9504～9506）と工学部R-I実験棟建設（9503）、工学部附属工学機器センター建設（9502）、事務局前外灯電線埋設工事に伴う発掘調査および立会調査がある。また、黒髪北地区では教養部前の道路切り替え工事（9520）に伴う調査がある。工学部研究実験棟設備関連の調査地点は、建物周辺にあたり、1994年度の同施設の埋蔵文化財調査地点の周囲に位置する。これらの諸地点は、遺跡の順序に違いがある。調査によって重要な所見が得られた地点の成果について述べる。

工学部研究実験棟共同溝建設工事に伴う発掘調査（9501）

<調査期間>

1995年4月25日～1995年5月2日

<調査参加者>

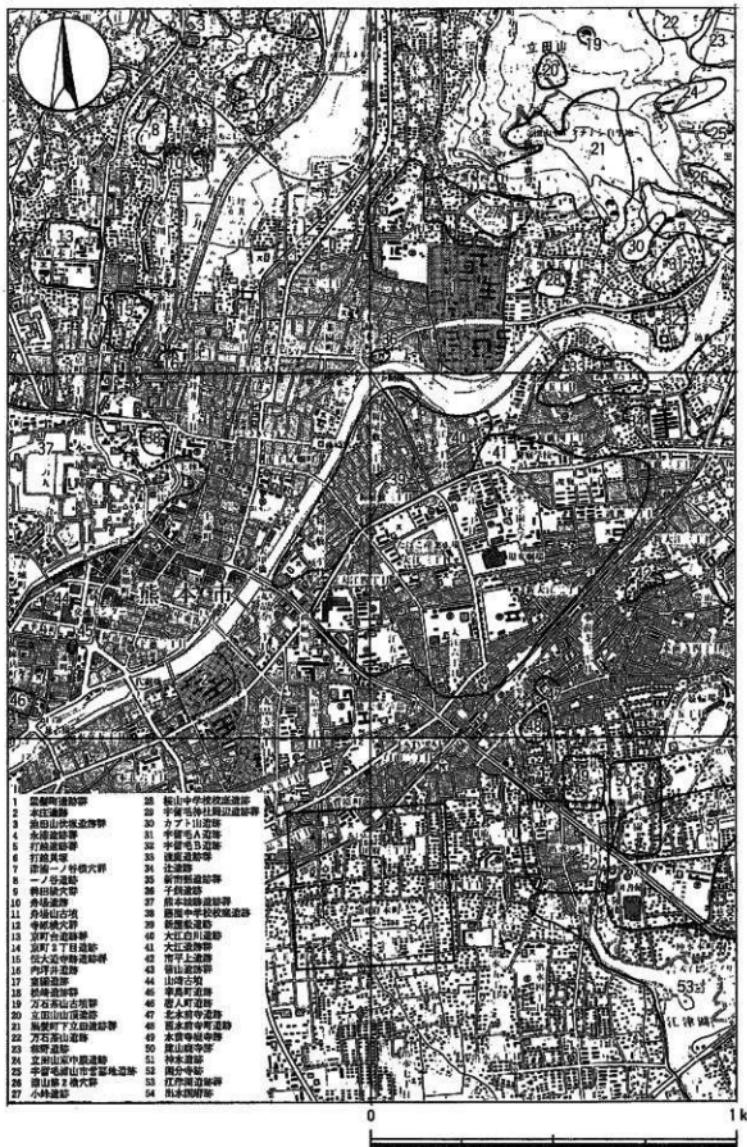
調査員：小畠弘己、作業員：飯田考俊、今村佳子、大坪志子、原田範昭、東真一、
本田浩二郎

<調査経過>

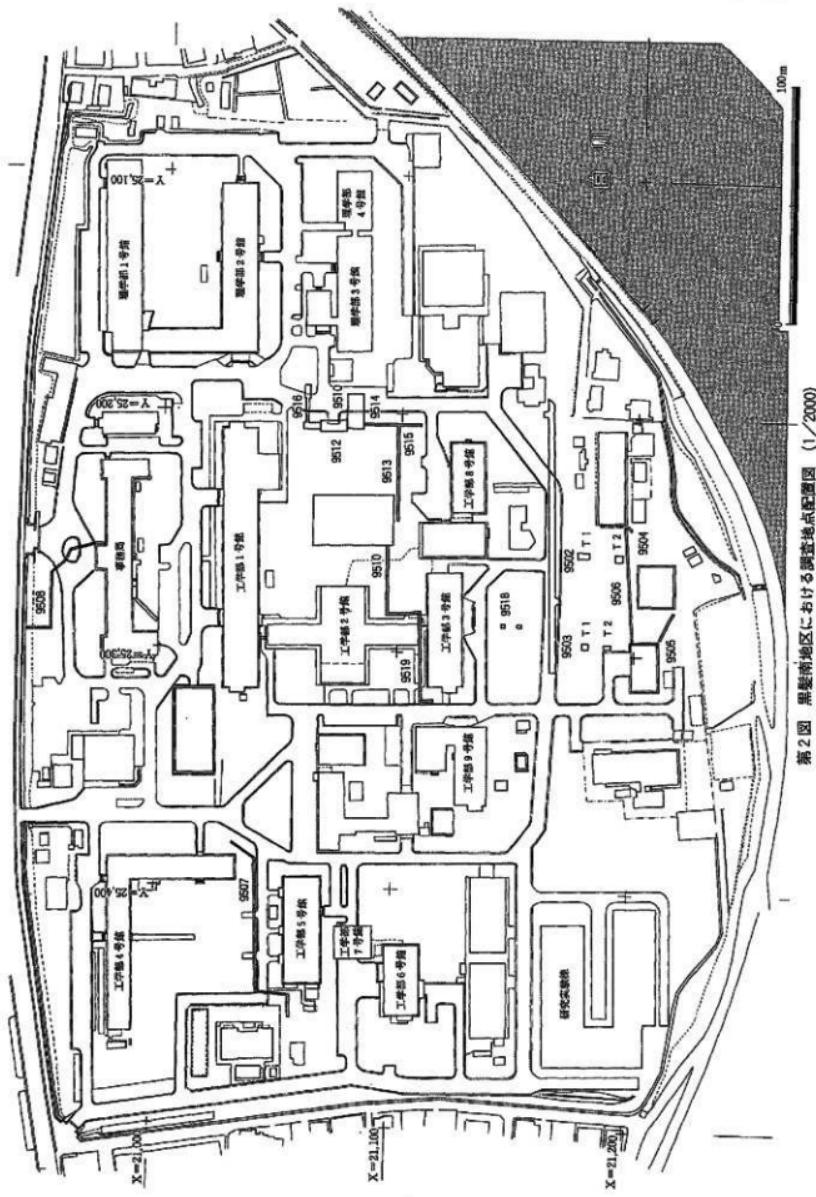
工学部実験棟東側道路部分にあたる。幅6m、長さ14mにわたって調査を実施した。道路のアスファルトおよびパラス、砂層、その下の擾乱層を機械力によって除去し、遺物包含層中ほどで人力による掘削により切り替えた。調査区の中ほどには幅2mほどの石組みの溝が道路と平行して調査区を貫いていた。また、西側には排水管およびその埋設溝や、それ以前の土管理設溝が認められ、大半が擾乱されていた（第3図）。

<基本層序>（第4図）

調査区の大部分を占める道路部分の土層の堆積状況は、道路の基盤土である砂層直下に遺物包含層である黒褐色（Hue25Y3/1）土層（厚さ20cm）が堆積している。その下は暗褐色（Hue10YR3/4・3/3）の火山灰土となり、この面で遺構を検出した。調査終了後の工事による掘削断面の観察によると、この暗褐色火山灰土層は、厚さ30cmほどで、その下部は厚さ1mほどの黒褐色（Hue10YR2/3）土層へと移行する。この層の下部にはスコリアが混じり、以下砂礫層となる。



第1図 黒髪町遺跡・本庄遺跡の位置と周辺遺跡の分布図 (1/25000)
 (この地図は国土地理院発行 1/25000 地形図「熊本」を使用したものである。)



第2図 黒森南地区における調査地点配置図 (1/2000)

<検出遺構>

第1号溝（第7図）

調査区の北西部で検出した溝である。この溝は、1994年度調査の研究棟西半の調査区南半において検出された溝状遺構に連なるものである。調査区をかすめるため、幅については建築工事掘削の壁面で確認した。その後、貯水樹工事に伴う発掘調査（9512）において北壁部分を調査することができた。断面形が台形を呈し、その幅は溝底部で2.5m、検出面で4mである。溝の方位は東西方向よりやや北に振れる。溝中の堆積土は5層に分けられ、上から1層—黒褐色土（厚さ60cm）、2層—黒褐色土（40cm）、3層—黒褐色土（20cm）、4層—褐色土（8cm）、5層—暗褐色土（10cm）である。5層と4層の間には拳大の礫が挟まる部分があり、この基底面（5層上面）に粘質の褐色土層（4層）が薄く堆積している（第7図）。これらの層は水成の堆積土であり、溝底はわずかに水が流れる状態であったことが推定される。

溝の出土遺物は、1層から3層までは18世紀後半以降の近世磁器および陶器を主体としている。4層以下は古代の須恵器や土師器を主体としているが、近世すり鉢片を1点含んでおり、時期決定に問題がある。溝の掘削時期は古代であると考えたい。3層以上は水の流れた痕跡はなく、近世まで溝が窪地として存在した可能性が高い。

第1号住居址（第5図）

調査区南東隅に約半分を検出した。検出部分での幅は2.5mである。北辺中央部に竪の痕跡をもつ。壁の残りはわずかで、15cmしか検出できなかった。竪は中央に若干の焼土と白色粘土の混じる土が残るのみで、明確な壁の立ち上がりや焚口なども検出できなかった。焚口に相当する部分には直径40cm、深さ70cmの穴があり、防湿を意図した掘り込みとも考え難く、時期の異なる遺構の可能性が高い。しかし、土層観察において上部より切り込んだ痕跡は認められなかった。

出土遺物は、上記の破片以外は小片が多い。須恵器・土師器の壊や壊など数片がある。

柱穴

柱穴は住居址の北側に20数個検出しているが、樹木の根穴との区別がつけ難いものもある。第7号柱穴は、偏平な河原石の根石を基底に据えてあった。

工学部研究実験棟貯水樹建設工事に伴う発掘調査（9512）

<調査期間>

1995年11月13日～1995年11月16日

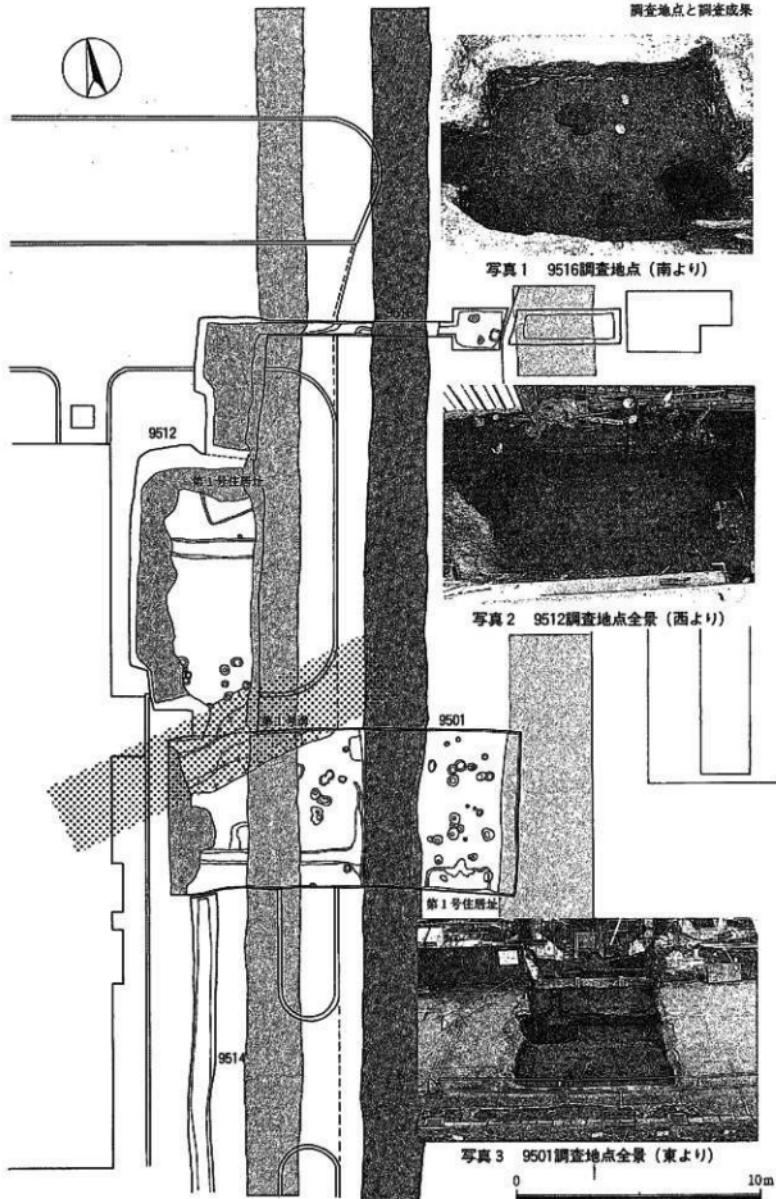
<調査参加者>

調査員：小畠弘己、作業員：飯田考俊、今村佳子、大坪志子

<調査経過>

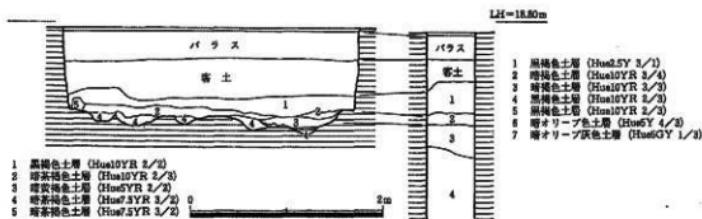
工学部研究実験棟北東角にあたり、一連の外溝工事にともなう立会調査を実施していたところ、地表下80cmに保存状態のよい遺物包含層を検出した。また、1994年度調査において旧建物の基礎があり、埋蔵文化財はすでに破壊されていると判断した地点まで、破壊を免れて広がることが判明し、建設中建物の基礎のための掘削部分間際まで範囲を広げ、発掘調査に切り替えた。調査は2日間を要した。遺物包含層まで機械力によって掘削し、表土および擾乱層を除去した後、人力による包含層の調査を開始した。遺物包含層の下の黄褐色土上面において遺構を検出した。その結果、竪穴住居址1基、溝1条、柱穴（根穴）数個を発見した（第3図）。

調査地点と調査成果

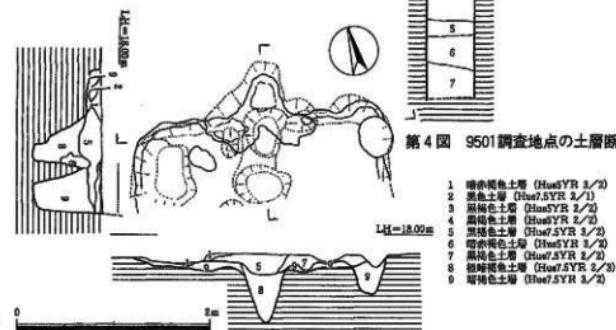


第3図 9501・9512・9514・9516調査地点の造構配置図(1/200)
(図中アリは復元)

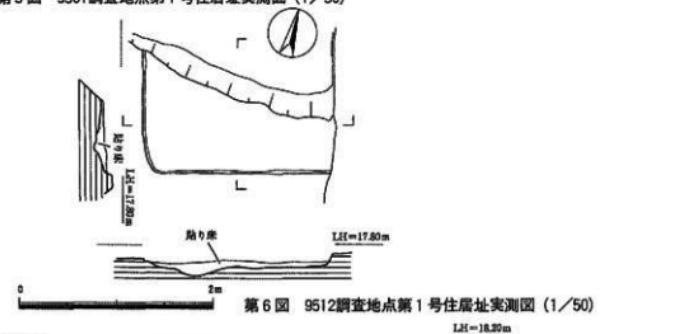
第2章 黒髪南地区の調査



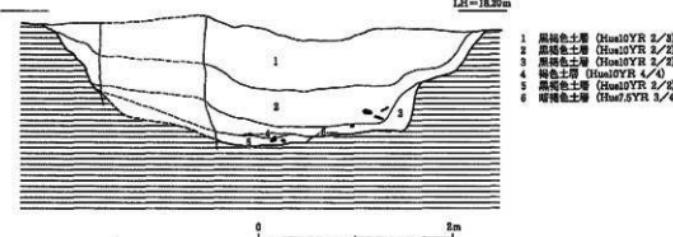
第4図 9501調査地点の土層断面実測図 (1/50)



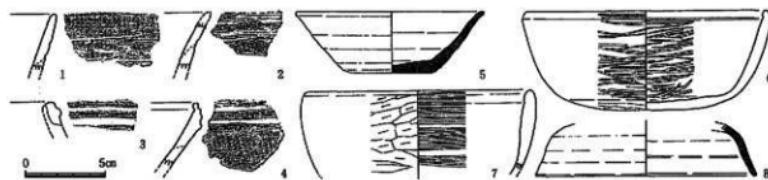
第5図 9501調査地点第1号住居址実測図 (1/50)



第6図 9512調査地点第1号住居址実測図 (1/50)



第7図 9501調査地点第1号溝土層断面実測図 (1/50)



第8図 9501-9512調査地点包含層出土土器実測図(1/3)

<基本層序>

土層の堆積状況は、ほぼ9501地点と同じであるが、遺物包含層の上に淡茶褐色の土層が堆積している。これは近世以降の遺物を含む層である。

<検出遺構>

第1号住居跡（第6図）

調査区北隅で検出した竪穴式の住居址である。北半は攪乱によって破壊されている。残存部の1辺の長さは2mである。検出面が低かったため、壁の残り具合は悪く、5cmほどである。床を精査したが残存部分において柱穴らしき痕跡は認められなかった。出土遺物は内面に削り痕のある土師器2片があるのみである。時期は、周辺の状況から古代であろう。

第1号溝

共同溝建築部分において検出した溝の北壁部分に相当する。深さ1.4mほどである。土層の堆積状況や出土遺物の性格も上記溝の所見に一致する。

工学部附属工学機器センター建設工事に伴う試掘調査(9502)

<調査期間>

1995年5月9日～1995年5月10日

<調査参加者>

調査員：小畠弘己、作業員：飯田考俊、原田範昭

<調査経過・結果>

旧地形の白川方向への傾斜を考慮して、建設予定地に南北方向に2ヶ所のトレンチを設定した。北側を第1トレンチ、南側を第2トレンチと称した。トレンチの土層堆積を観察するとは水平に堆積した土層を認めることができる。第1トレンチでは3層まで水平堆積が見られるが、第2トレンチでは下層まで水平堆積が続いている(第9図)。このように2地点間で堆積状況が大きくなるのは、河川による侵食、堆積作用が南側地点において著しかったことを示している。

遺物はトレンチ1の第4・5層より内面にケズリ痕のある土師器壺の小片が、トレンチ2の第7層より須恵器壺蓋の小片が1点出土したにすぎない。遺跡の周辺部の状況を示している。

工学部R1研究実験棟建設工事に伴う試掘調査(9503)

<調査期間>

1995年5月15日～1995年5月16日(試掘調査)

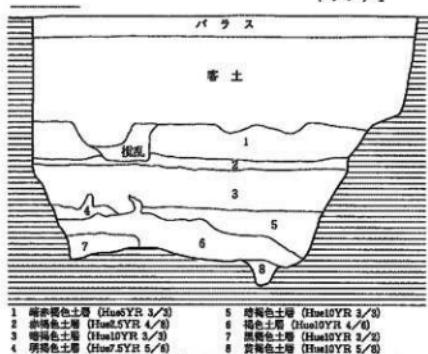
1995年11月21日～1995年11月22日(立会調査)

<調査参加者>

調査員：小畠弘己、作業員：今村佳子、田中大介、本田浩二郎

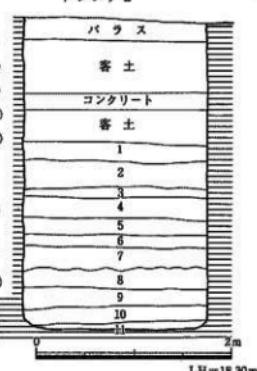
第2章 黒髪南地区の調査

トレンチ 1



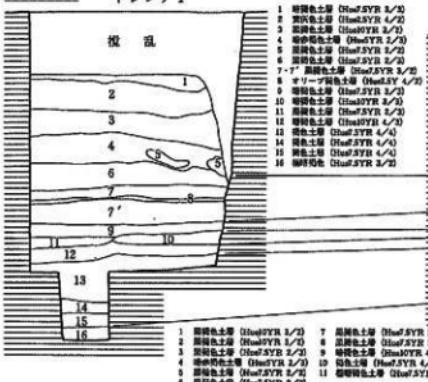
第9図 9502調査地点土層断面実測図 (1/50)

トレンチ 2



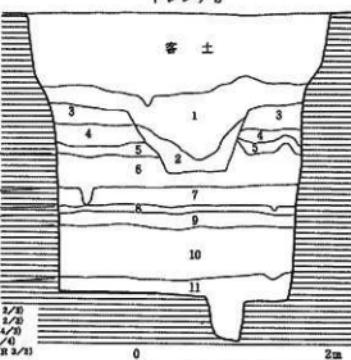
LH=18.30m

トレンチ 1

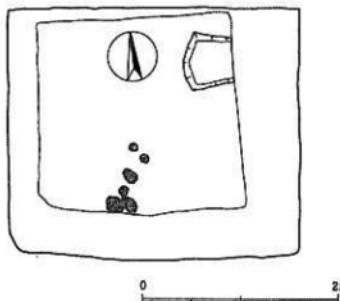


第10図 9503調査地点土層断面実測図 (1/50)

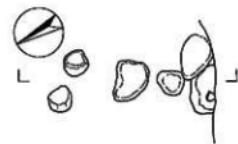
トレンチ 2



2m



第11図 9503調査地点トレンチ 1 平面実測図 (1/50)



LH=15.80m



第12図 9503調査地点集石造構実測図 (1/20)

<調査経過・結果>

機器センター建設予定地の西に隣接する地点である。上記調査と同様に2ヶ所にトレンチを設定した。その結果、やはり水成作用による砂と土の互層が水平に堆積する状況が観察された(第10図)。3mほどまで掘削したが、それより下も土層の堆積が続く。トレンチ1で細分された13~15層は第2トレンチでは10層として細部できなかった。堆積の状況が地点で異なるのは、河川堆積の結果であることを示している。

<検出遺構>

第9層において径10cm~25cmの河原礫6個からなる集石遺構を検出した(第11・12図)。石は焼けたように赤変しており、表面に白色の付着物があるものも認められた。周辺には炭化物は認められなかった。上層および周囲から須恵器や土師器などの遺物が若干出土した。

後日、工事掘削に際して立会調査を実施したが、集石周辺からは若干の遺物が出土するのみで、他の遺構を検出することはできなかった。

その他の調査

上記の他、工学部研究実験棟外溝工事に伴い実施した立会調査(9515・9516・9519)(第2図)において、柱穴や小さな溝などを検出した。これにより遺物包含層や遺構が、建物などで攪乱されていない部分に良好な状態で保存されていることが判明した。今後の調査の参考となった。

3.まとめ

本年度の黒髪南地区の調査は、工学部実験研究棟周辺の調査において、1994年度に実施した本体部の発掘調査の結果を追認する形となった。9501と9512調査地点で検出された溝は、本体部の調査で確認された溝の延長部であり、さらに新たに検出された竪穴住居址2基は、これとあわせて集落の広がりを裏付ける結果となった。出土遺物が少量なため断定はできないが、その形態や規模からみて、これらの遺構は前回検出された住居群と同じ、8世紀後半から9世紀前半にかけてのものであろう。また、集落の境と考えされていた溝の南側にも新たな住居が検出されたことは、溝の性格と集落の範囲に関して再考を促すものであろう。今後周辺の調査に期待したい。

また、既存建物の基礎で破壊されていたと考えられていた部分にも遺構が断片的ながら存在するという事実は、今後、調査の可否にあたって充分に留意すべきことであろう。

より白川沿岸に近い地点(9502・9503)の調査成果は、古代の遺物包含層や遺構が地表から2mあまりの深いレベルにあることを教えてくれ、集落周辺の土地利用を考える上では、今後とも精査に努めなければならない重要な地点である。また、集落部との土層の対比も今後の課題であろう。

【参考文献】

熊本大学埋蔵文化財調査室 1994 『熊本大学埋蔵文化財調査室年報』第1集

第2章 黒髪南地区の調査



写真4 9501調査地点全景（北西より）



写真5 9501調査地点第1号溝土層断面（西より）

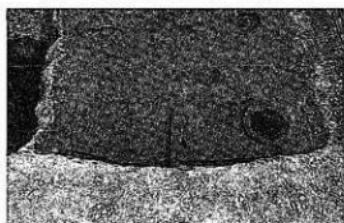


写真6 9501調査地点第1号住居址（南より）



写真7 9512調査地点第1号住居址（北より）

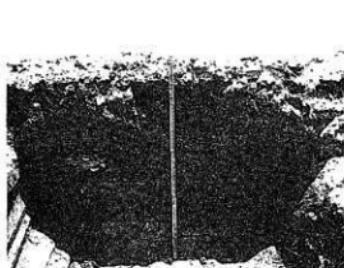


写真8 9502調査地点トレンチ1土層断面（西より）



写真9 9503調査地点トレンチ1土層断面（西より）



写真10 9503調査地点トレンチ2土層断面（西より）

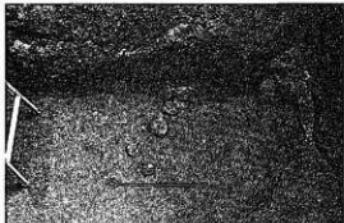


写真11 9503調査地点集石造構（北から）

第3章 合津地区の調査（9509）

1. 調査に至る経過

理学部は天草郡松島町合津6061に所在する熊本大学理学部附属臨海実験所内の実験研究棟の老朽化に伴い、施設の拡充も含め改築を計画した。臨海実験所およびその隣接地には、前島貝塚および梅殿塚古墳が所在しており、建設地内には縄文時代の貝塚および生活址が存在することが予想された。このため、1995年7月7日に埋蔵文化財調査委員会委員長および理学部委員、埋蔵文化財調査室長、施設部による三者会談を開催し、建設にあたって谷部（I区）および実験研究棟敷地部分（II区）を埋蔵文化財調査の対象とし、1995年9月より約1ヶ月間の発掘調査を実施することとした。

調査は、1995年9月11日より実施した。調査は谷部（I区・標高3.25m）より開始し、実験棟敷地は建物解体後に実施した。II区（標高7.5m）の調査の際、建設予定の無い貝塚隣接地（III区）において樹木伐採および配管切り替えが実施されており、この地において貝塚の貝層と認識されている旧畠の混貝土層が良好に残っていることが確認された。建築際に問い合わせたところ、この駐車場側の約200m²は、擁壁工事によって切り土されるとのこと、急遽工事を停止し、発掘調査を実施することとした。このような事態は、協議段階において基本設計のみが提示され、その実施設計の段階で変更が発生したにもかかわらず、その連絡がなされていなかったことに起因する。

<調査期間>

各調査区における調査期間は以下のとおりである。

I区（25m²） 1995年9月11日～9月14日

II区（93m²） 1995年9月28日～9月29日

III区（180m²） 1995年10月2日～10月12日

<調査参加者>

調査員：甲元真之、小畠弘己、作業員：飯田考俊、石橋一也、稻田和加、今村佳子、上田健太郎、川野博之、濱田智美、原田範昭、藤江望、藤木聰、本田浩二郎、松本千歳、村山志穂、吉岡和哉

<調査協力者>

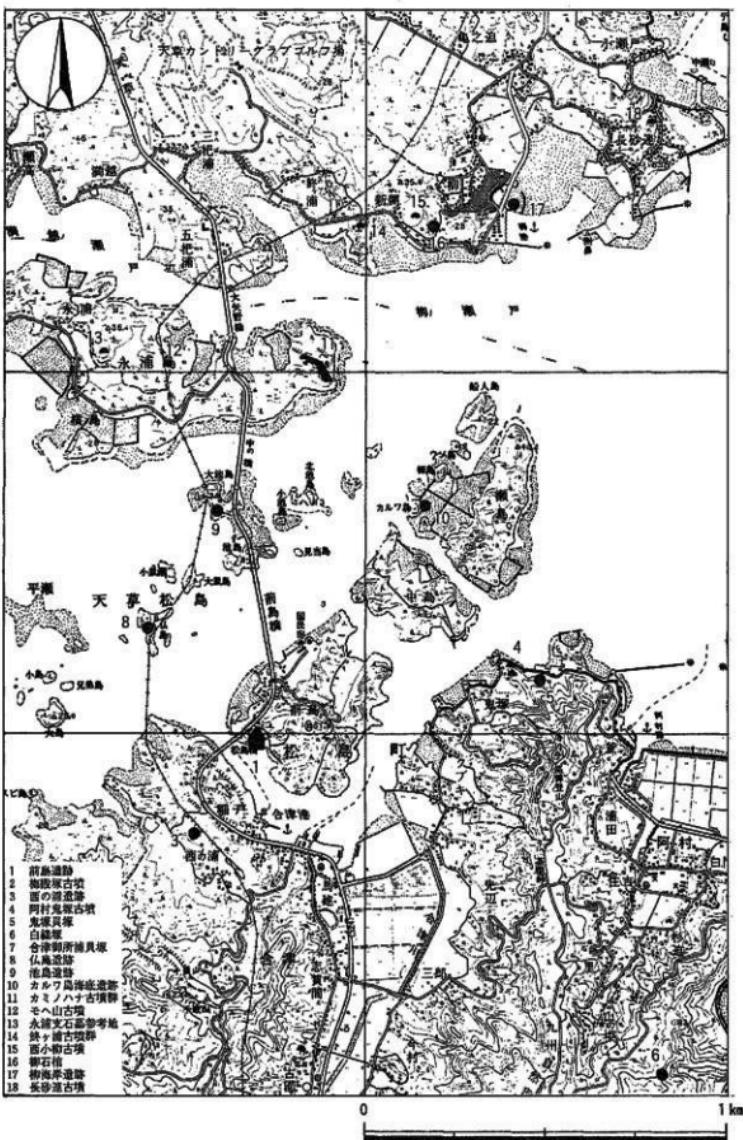
山田康弘（熊本大学考古学研究室）、山口隆男、野島哲、鳴崎三男（熊本大学理学部附属臨海実験所）、宮本綱子（県立大矢野高校）、山崎純男（福岡市教育委員会文化財部）、吉沢哲雄（松島町教育委員会社会教育課）、福田正文

2. 遺跡の立地と周辺の遺跡（第13図）

本遺跡は天草諸島の一つ上島東部にある松島の南西部端、標高12mの丘陵端部に位置する。この松島を含めた一帯は、有明海から不知火海へ抜ける海上交通の要衝にあたり、天草で唯一の形象埴輪を出土したカミノハナ古墳群や長沙連古墳、大戸鼻古墳群などの重要な古墳が密集しているように、古来より重要な拠点として意識されていた地域でもある。本遺跡の隣接地には横穴式石室を主体部にもつ梅殿塚古墳があり、地元の厚い信仰を受けている。

縄文時代に目を転じれば、カルワ島遺跡や柳遺跡のように海岸部もしくは海底に存在する遺跡が数多く認められる。本遺跡南部の海岸においても縄文時代早期から前期の遺物が採集できる。このような海岸・海底遺跡の成因については、天平十六年（744年）の大地震による沈降説がある。

第3章 合津地区の調査



第13図 前島道路の位置と周辺遺跡の分布図 (1/25000)
(この地図は国土地理院発行 1/25000地形図「天草松島」を使用したものである。)

3. 前島遺跡の既往の調査と認識

前島遺跡の最初の発見は、坂本經堯氏が1956年4月28日、「三角・天草史蹟めぐり」の際、梅殿塚古墳付近において貝殻や黒曜石を採集したことによる（坂本1956）。このとき採集された貝殻条痕文土器2片は、「天草縄文土器第一号」とされ、この発見は天草の縄文研究上記念すべき出来事となった。また、この報告の中で、坂本氏は、今津中学校の小西康氏所蔵の3個の石鎌が、この地から発見されたことを確認し、うち2点が縄文期に属すること、そのうち1点は、瑪瑙質の有柄石鎌で対馬のものと類似することを指摘し、その重要性に注目している。貝塚と目される部分は、1963年より開始された天草五橋架橋工事の道路によって東西に分断され、東側にレストランなどが建設されたことにより破壊を受けたとされる（熊本県教育委員会1968）。最初の調査は、1966年の天皇皇后両陛下の臨海実験所への見学の際の取り付け道路建設に際して、熊本女子大学（現熊本県立大学）の乙益重隆教授を団長とする調査団によって1966年8月16日から8月25日まで実施された。

この時点での貝塚の状態は、道路によって東西二地区に分断されたと報告されている。記述によれば、東側はレストハウスの前庭から熊本大学臨海実験所の裏手台上まで約80平方米にわたって貝塚が分布する（第14図）。貝殻はレストハウスから東側の斜面にかけて濃密に分布するが、こまかく破碎され、耕作土となっている。レストハウス北側の破碎混土層は谷に流れ込んだものであると解釈されている。そして調査結果とも併せて、貝塚はすでにこの時点で消滅状態にあることが指摘された。西側についての調査結果も同様なものであり、「おそらく本来の貝層は架橋道路の下に埋没しているものと思うが、今は確かめようがない」と結び、貝塚が破壊状況にあること、良好な貝層が道路下のみに残存しているとした。

この調査の際の出土遺物は、東西15個のトレンチを掘削した割には極めて少なく、石鎌3点、縄文土器片数点、須恵器1点である。縄文土器はアルカ属の貝殻で横走条痕を施したもので、胎土の状態から後期のものではないかと推定されている。石鎌の形態は採集品も含めて4つに分類され、先述の有柄石鎌の希少さと重要さが強調されている。

自然遺物は未整理で、発掘時の所見から、貝殻としてカキ、ハイガイを主とし、コシタカガングラ、ウミニナ、フトヘナタリなどが主なものであったとされる。また、シカとイノシシの小骨片も採取されている。以上、第1次調査の結果としては、貝塚の破壊状況を物語るものであったと報告されている。

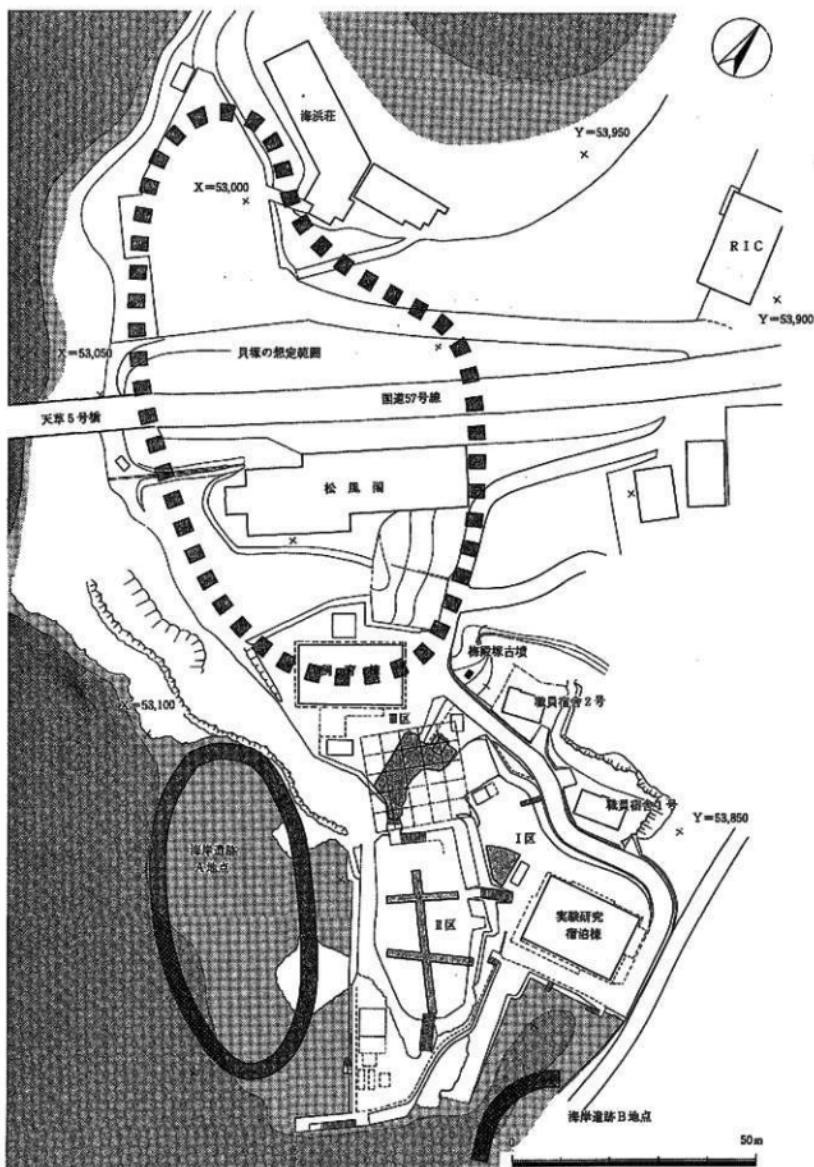
本遺跡における本格的な調査は、これ以後実施されていない。臨海実験所内において1979年に貝塚端部に相当すると思われる斜面上に飼育棟が建設される際に、熊本県による試掘調査が実施されている。しかし、この成果や調査の概要についてはいまのところ不明である。

これ以外に本実験所内において考古学上重要な所見がわずかながら存在する。まず、船着き場の浚渫の際に多量の縄文時代の遺物が採集されたという所見である。現在この宿泊棟前面の海岸は若干の遺物が採集できる。しかし、これより多量の遺物が採集されるのは、実験研究棟の西側海岸である。この地点は先の宿泊棟前の海岸を浚渫した際にその土砂を廃棄した場所ともいわれている。その成因は不明であるが、海岸部に遺物包含層が存在することは確実である。

また、梅殿塚古墳の東斜面にある職員宿舎2号が1969年に建設される際にも、建築業者によって石斧7点が発見され、地元建築業者がもっていったという情報がある。この地点は谷頭に近い斜面部であり、7本という数は、デボのような埋納遺構の存在が想定され興味深い。

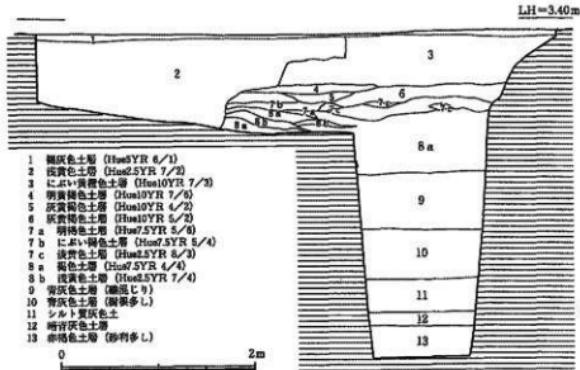
以上より、貝塚付近には丘陵斜面と海岸部の遺跡が存在することが予想される。

第3章 合津地区の調査

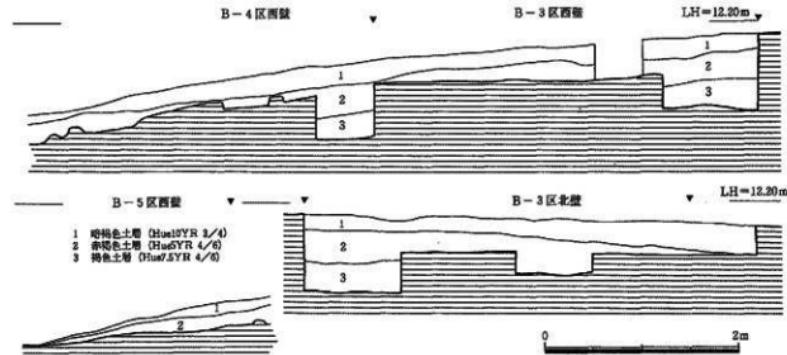


第14図 前島遺跡調査区位置図 (1/1000)

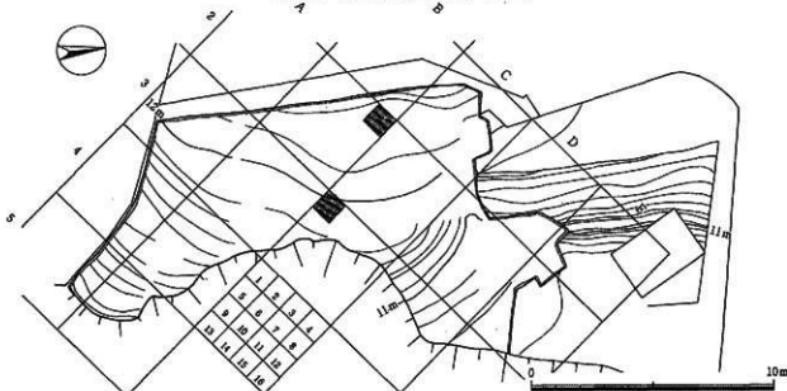
調査結果



第15図
I区土層断面実測図 (1/50)



第16図 III区土層断面実測図 (1/50)



第17図 III区混貝土層 (旧耕作土) 露出状況実測図 (1/200)

4. 調査結果

I区においては、地表下1.5mに砂礫を含む泥炭層が存在する。樹木を多く含み、谷が埋没した状況を示している。上部の埋土中より時期不明の磨耗した土器片1点を発見したにすぎない。(第15図)

II区は地形にあわせて3本のトレーンチを掘削したが、すでに地山の岩盤層が露出しており、旧建物(実験棟)の建設に先立って削平をうけていることが判明した(写真23)。

III区は駐車場のアスファルトとパラスの層および客土の下に粉碎された貝殻を多量に含む旧畑の耕作土(暗褐色土 Hue10YR3/4)が堆積しており、これを從来報告してきた貝層と判断し、この混貝土層(1層)を露出させて調査を開始した。耕作土は地形の傾斜に沿って、厚さ0~20cmの厚さで堆積していた(第16図)。調査の経過に伴い、混貝土層中からは明治以降の磁器片が出土し、畑の開墾にともなって攪乱されているものと判断した。しかし、基盤の赤褐色土(Hue5YR4/6)に切り込まれた排水管用の溝の同性質の埋土からチャート製石織(第27図1)が発見され、基盤土に遺物包含層が存在することが予想された。また、B-3区の混貝土層下部から出土したサヌカイト製石織(第27図2)には、縄文時代早期に特徴的な形態が認められた。そして、混貝土層の除去後、黄褐色土(2層)を掘りはじめたところ、A-4区から山形押型文土器片が出土し、この層中に縄文時代早期の包含層が存在することが裏付けられた。混貝土層は部分的に土壤サンプルを採取し、調査区内の全層を掘りあげた。その後、早期の遺物包含層に主体をおいて調査を開始した。その結果、集石遺構1基を検出し、当地が該期の生活址であることが確認された。以下、III区の調査成果について述べる。

調査区は丘陵の尾根の主軸に方向を合せ、1辺4mのグリッドを設定し、東西方向をA~E、南北方向を1~5として、両者の組み合わせで呼称した。またグリッド内を1m四方に細分し、北西から南東方向へ1~16の小区とした(第17図)。

1層出土遺物

1層からは磁器片少量、瓦質土器1片、縄文土器少量、石錐1点、黒曜石・チャート製剥片数点が出土した。出土貝類としては、レイシガイ、ツメタガイ、マダラクダマキガイ、オガイ、ウミニナ、イボウミニナ、クボガイ、コナガニシ、ナガニシ、テングニシ、シオヤガイ、ハイガイ、イタヤガイ、ヒオウキガイ、ウチムラサキガイなどがある(写真12)。サンプル洗浄を行ったところ、上記貝以外に調査時には確認できなかったフジツボの貝殻の小片(写真13)が多量に含まれていること、個体の大きさに選択性がなく、食用に適していない稚貝が多量に含まれていること、魚骨がまったく含まれていないことなどが判明した。よって、本層中に含まれる貝類は、畑の肥料として撒かれたものと考えられる。

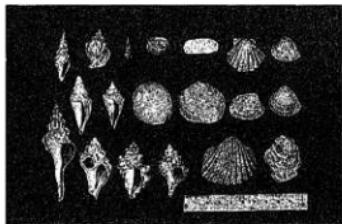


写真12 1層出土各種貝

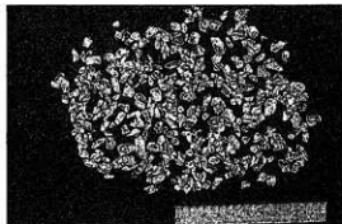
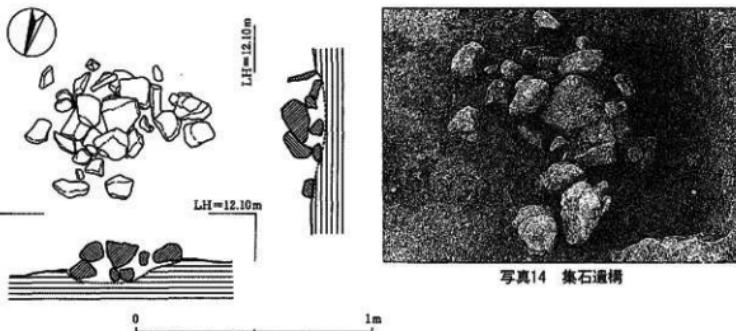


写真13 1層出土フジツボ

2層検出の遺構と遺物

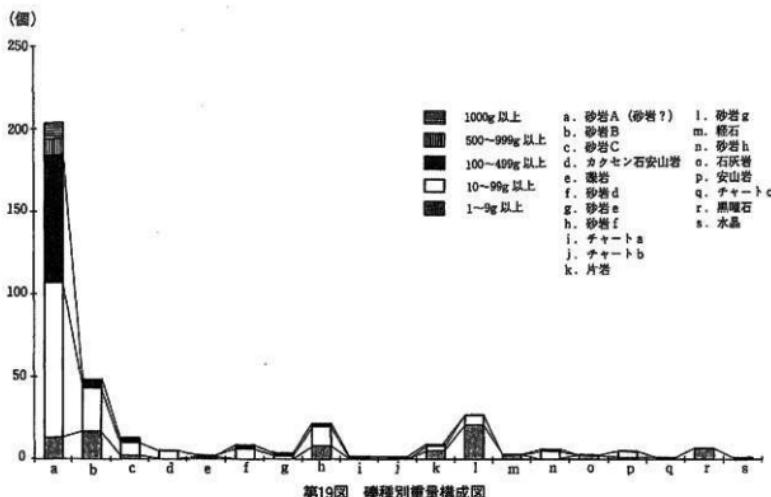
<集石遺構> (第18図)

B-2区で検出した36個の礫から成る集石炉である。平面形は0.8m×0.5mの楕円形を呈し、礫はほぼ2段に積まれる。掘り込み面は明確ではないが、礫の底面をたどるとほぼレンズ状の浅い掘りこみ状を呈する。石材は砂岩を中心で焼けたように赤化しててもろい。礫の構成は砂岩A30個、砂岩B3個、その他3個で、重量は79~200gで、200g前後のものが最も多い。隣接する2個体4点が接合した。礫除去後の土壤も赤色化して、若干の木炭粒が散漫に散らばっているのが認められる。



第18図 集石遺構実測図 (1/20)

写真14 集石遺構



<礫の分布>（第20～22図）

調査区の南部（A・B-3～5区）を中心に最大で5kgほどの砂岩Aなど多量の礫が出土した。礫の種類は砂岩、片岩、礫岩などがある。その数および重量構成を示したのが第19図である。これをみると本調査地点における礫群を構成する石材のうち主体を占めるのは、砂岩Aと砂岩Bであることがわかる。これは集石遺構の主要構成石材と一致する。礫は3区を境として大きく南北2群に分かれて分布しているが、集石遺構の存在しない南群にも、A-3区14区とB-3区14区に密集する箇所がある。しかし、この付近に木炭や焼土などは認められなかった。

<土器・石器の出土状況>（第23～25図）

土器や石器は調査区全体から出土しているが、その密度は南半部（丘陵端）が高い。土器はB-4区において無文土器A類の個体が集中する箇所が認められる。それに重なるように山形文土器の集中が認められる。石器は散漫な分布状況を示している。細かくみれば、磨製石斧とその製作剥片が集中する部分と、黒曜石やサヌカイトの剥片やチップが集中する箇所などのように石材による分布の異なりが認められる。しかし、さほど際立ったものでもない。

<土器>（第26図）

土器は総数で125点出土した。うち36点は残り具合が悪く、種類は不明である。弥生時代中期鋤先口縁土器片1点、滑石混入土器（縄文時代前期土器か）小片2点以外は、押型文土器・無文土器などの縄文時代早期の土器が大半を占める。



写真15 A・B-4・5区遺物出土状況 (南東より)



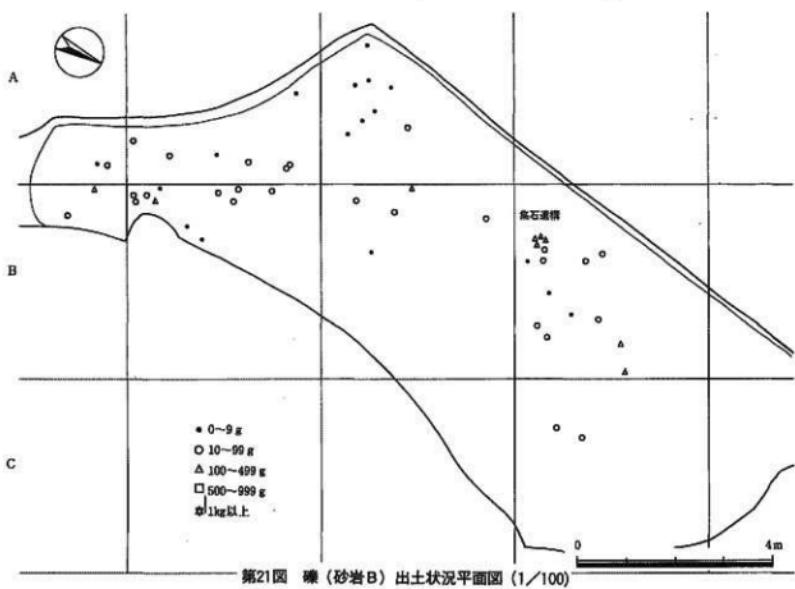
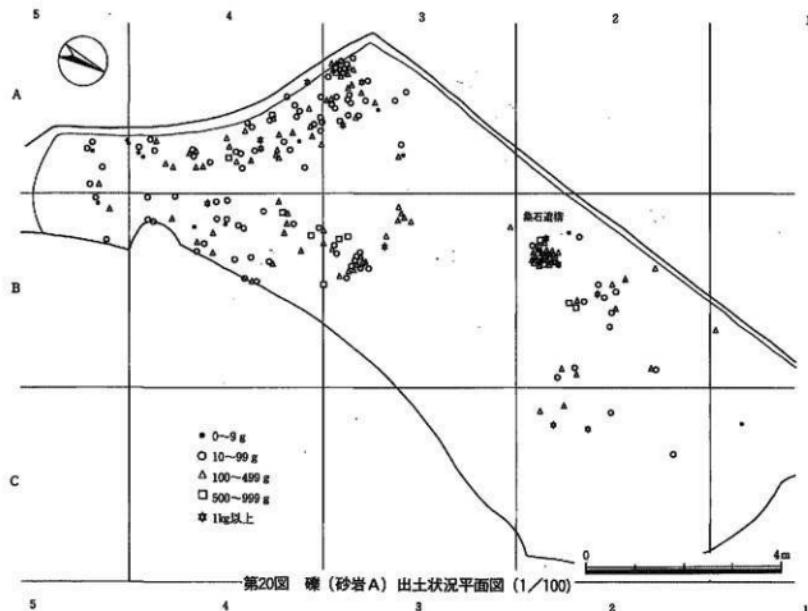
写真16 石斧出土状況 (南東より)



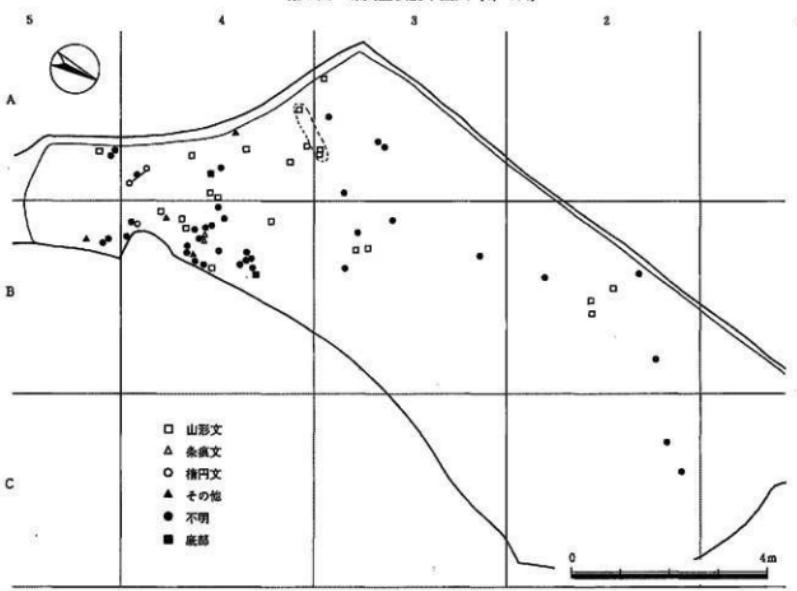
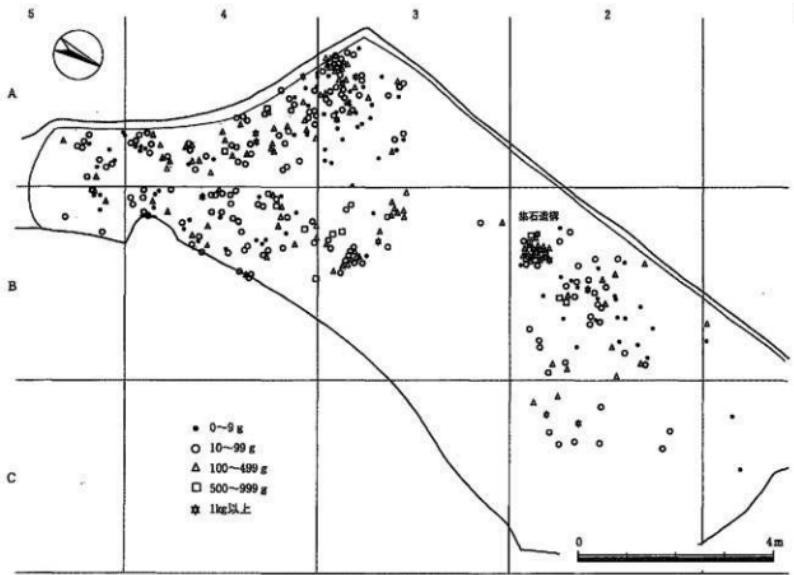
写真17 遺物出土状況 (南東より)

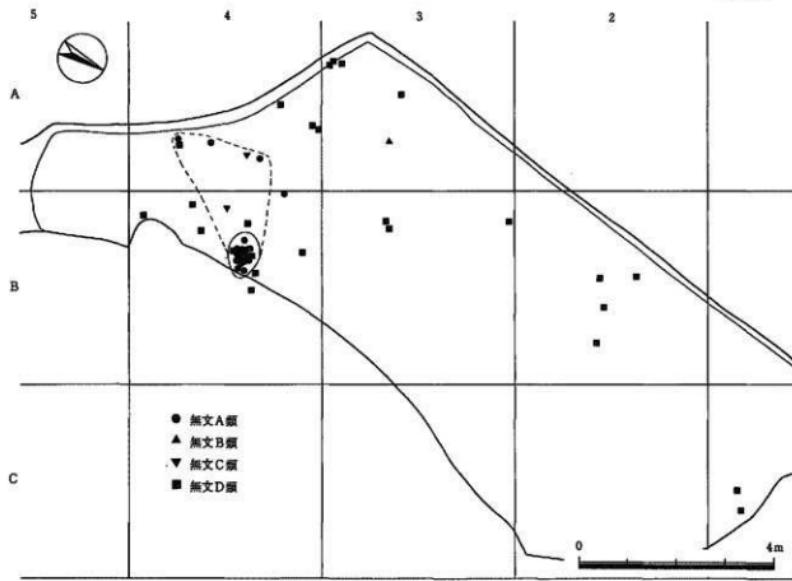


写真18 磯出土状況 (北より)

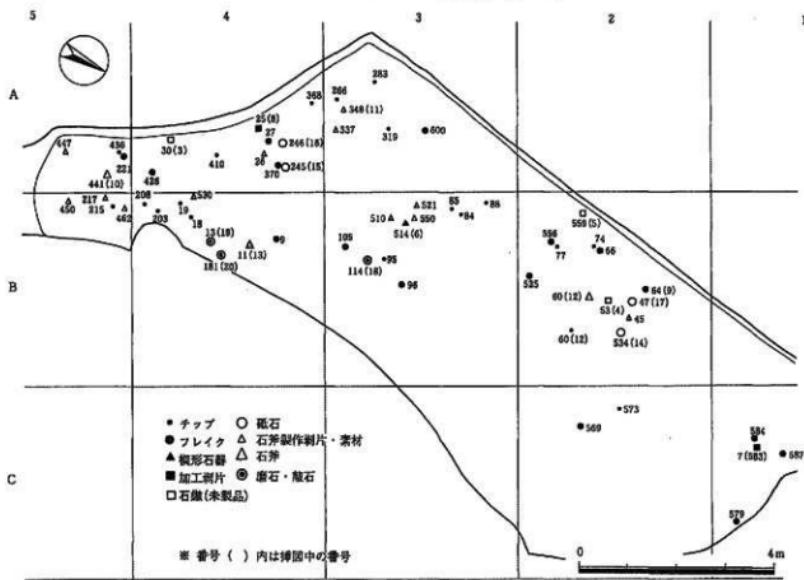


第3章 合津地区の調査

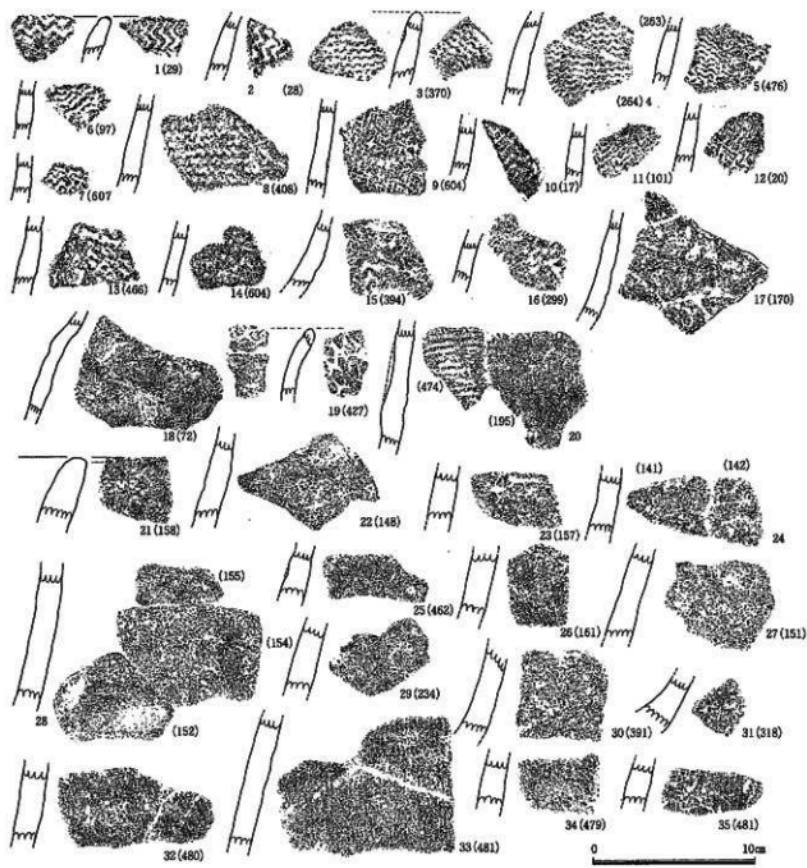




第24図 土器出土状況平面図(2) (1/100)



第25図 石器出土状況平面図 (1/100)



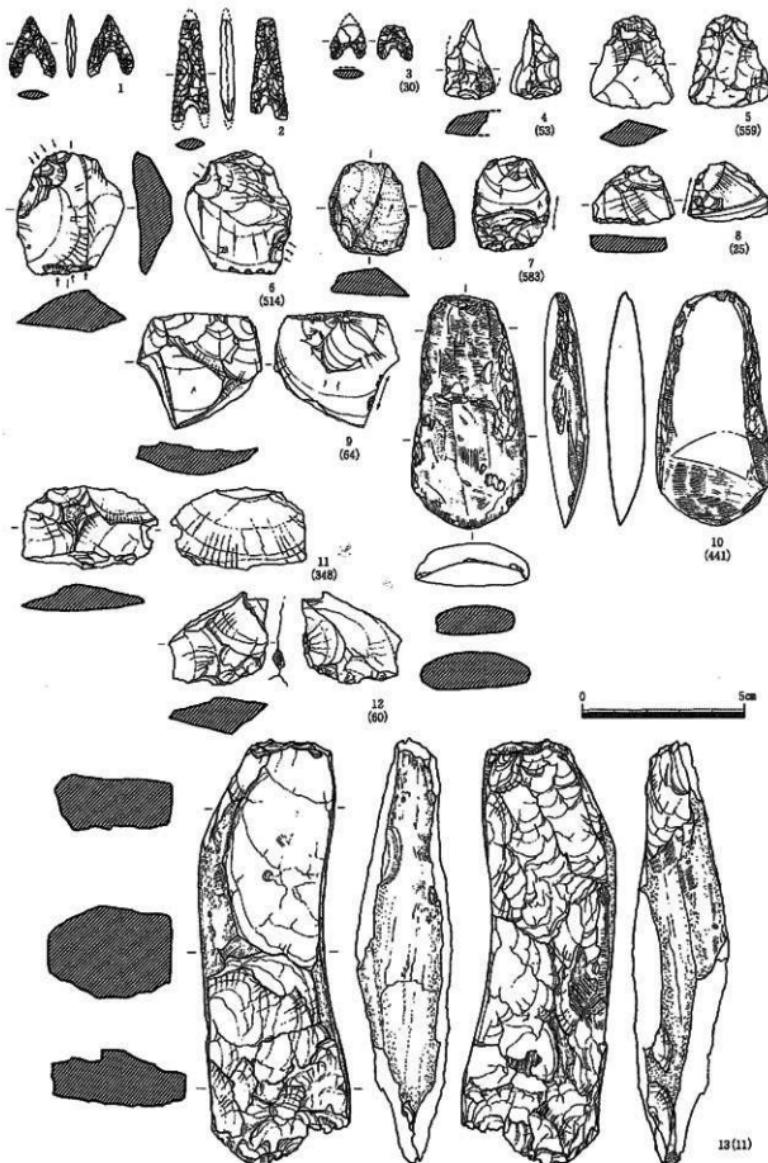
第26図 III区出土土器実測図(1/3)

押型文土器 山形押型文土器が19類22点、楕円押型文土器が2類3点ある。

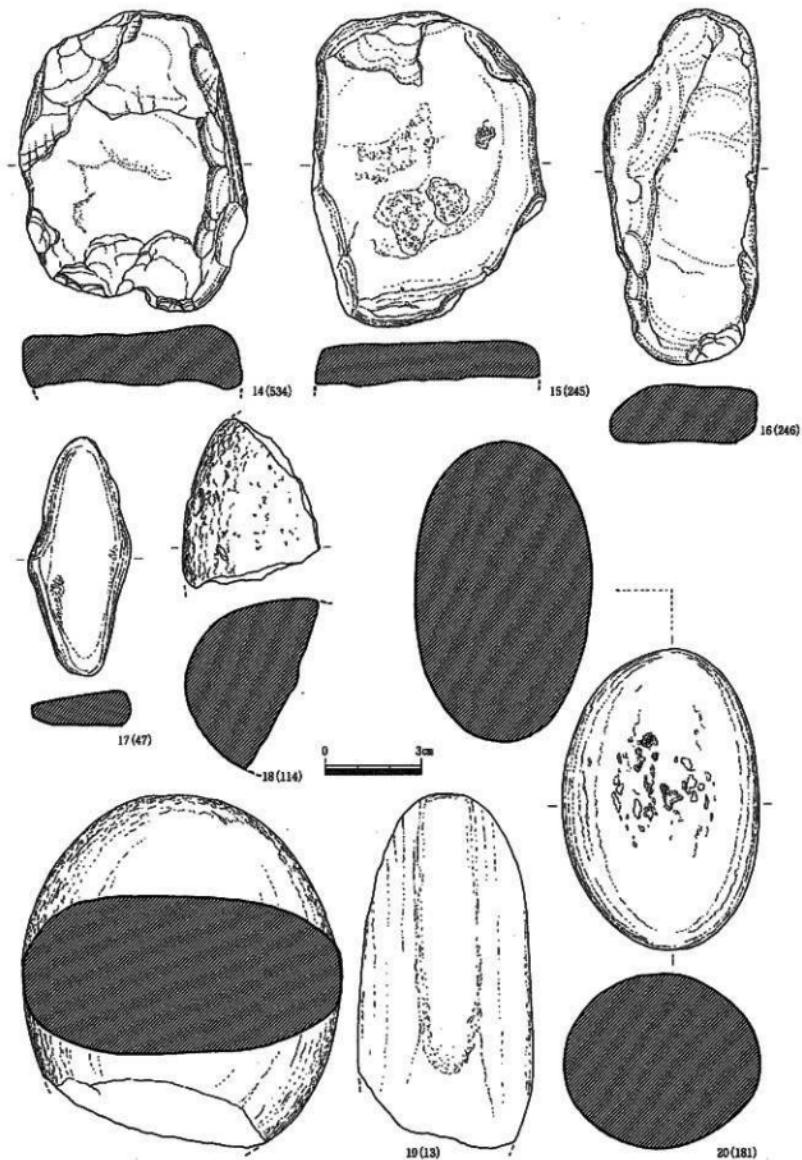
無文土器 厚手無文の土器とそれ以外の薄手のものがあり、5類に分けた。主体を占めるのはA類(27点)とD類(27点)である。

<石器> (第27-28図)

石器は総数で63点出土した。石器の種類としては、石鎌(未製品を含む)3点、磨石3点、石斧(破片も含む)3点、砥石4点、使用痕のある剥片1点、加工痕のある剥片2点、楔形石器1点、剥片・碎片16点、チップ21点、石斧素材1点などがある。石材としては腰岳系の黒色黒曜石、淀姫系の青灰色黒曜石、チャート、サヌカイト、砂岩などがある。特徴的なものは、石斧製作時および再加工時の剥片や素材の存在である。



第27図 III区出土石器実測図(1) (2/3)



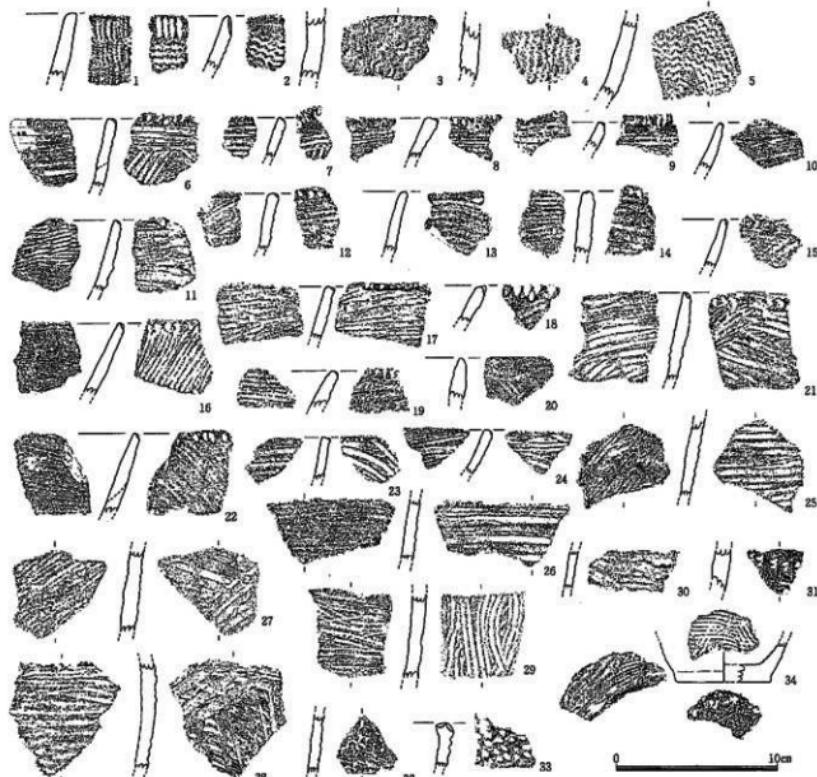
第26図 III区出土石器実測図(2) (2/3)

海岸遺跡採集の遺物（第29・30図）

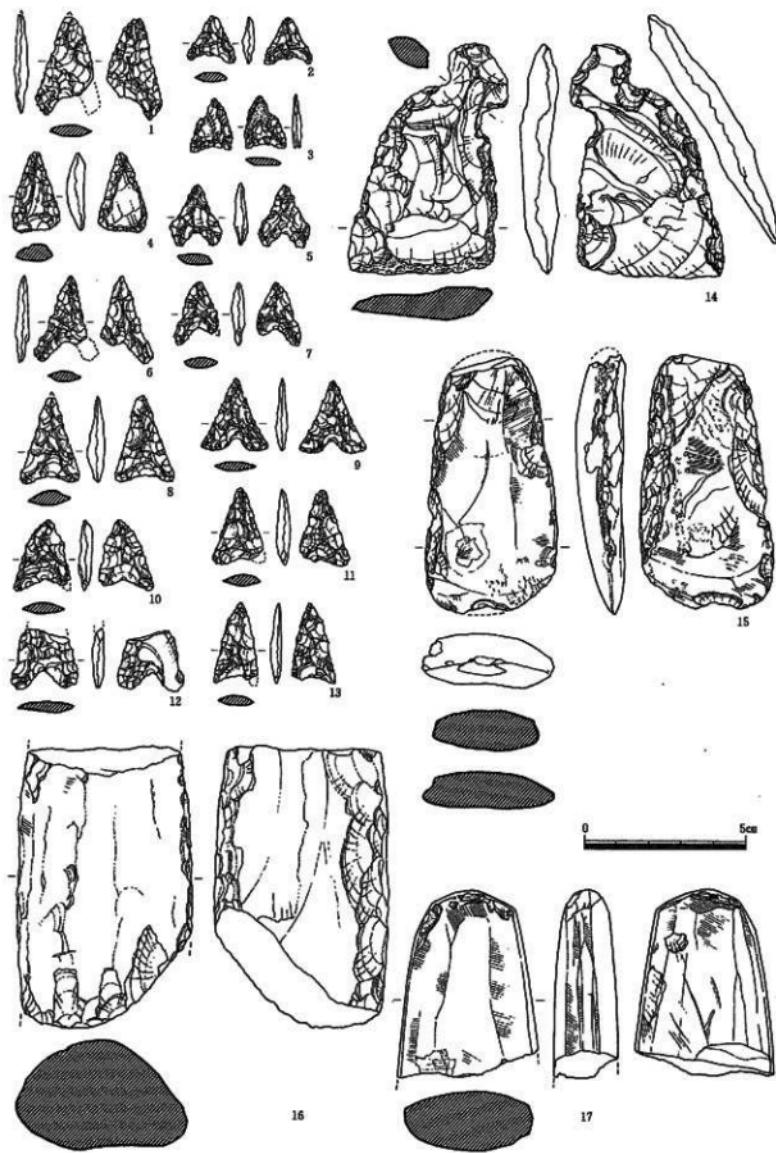
臨海実験所の南側に広がる海岸において、干潮時に多量の土器片や石器・剥片を採取することができる。調査の合間を縫って採取した遺物をここで紹介しておく。採集地点は、波止場の西側をA地点、東側をB地点と呼称した（第14図参照）。うち遺物を多量に採取できるのはA地点である。採集遺物は、縄文時代のものを中心としているが、若干の須恵器片も含まれる。

第29図1は、縄文時代早期の口縁部に沈線文をもつ円筒土器片である。2～5は押型文土器である。6～30は条痕文を地紋にもつ縄式土器である。ほとんどがA式に属するが、30は貼りつけ隆帯文をもつB式である。31は2連の刺突列点文をもつ。32は貝殻腹縁を刺突した文様をもつ。33は胎土に滑石粉を混入した円形の刺突列点文をほどこす曾畠系の土器片である。

第30図1～13は石鏸である。1・3・5が黒色黒曜石、2・4が青灰色黒曜石、6～13が



第29図 前島海岸遺跡出土土器実測図(1/3)



第30図 前島海岸遺跡出土石器実測図 (2/3)

サヌカイト製である。14は青灰色黒曜石製の縱形の石匙である。15は玄武岩製の小型の石斧である。側辺に剥離痕を留める。16は玄武岩製の断面形蒲鉾形の石斧である。17は熱変成を受けた砂岩製の全面磨製の石斧頭部である。

第29図33はB地点で採取したものであり、他はすべてA地点採集品である。

5. まとめ

今回の調査によって、天草において数少ない縄文時代早期の生活址と遺物を検出することができた。集石遺構の検出は初例であろう。また、従来貝塚として認識されていた「前島貝塚」も実態のないものであることが明らかになった。その原因是、近代以降になって耕作用の肥料として海岸から採取され畑に撒かれた貝と、その下にある縄文時代早期の遺物が開墾によって浮遊し、混じりあって、あたかも人工的な貝塚のようにみえたことを誤って認識したためである。その根拠として、食用に適さない稚貝やフジツボが多く含まれるウミニナなどに食した痕跡がない、魚骨がない、貝層は近代以降の遺物を主体としこれに含まれる縄文時代の遺物には磨耗した痕跡が認められる、これまで調査の調査で得られた遺物もきわめて少ないので諸点があげられる。このように懐疑的な観点からみれば、これまでの調査において貝塚の純層が確認されておらず、貝塚周辺部としての認識しか得られていないかったことも納得がいく。天草地方には「イセ」とよばれるこのような貝を畑の肥料として散布する風習がごく最近まで認められたのである。

よって正確には「前島遺跡」と呼すべきであり、本書ではこれを使用した。また、海岸部の遺物散布地も「前島海岸遺跡」として登録されるべきであろう。

【参考文献】

- 坂本経堯 1956 「古代の天草」『熊本史学』10
- 熊本県教育委員会 『熊本県文化財調査報告 前島貝塚発掘調査』9
- 坂本経堯・経昌 1971 「天草の古代」
- 山崎純男 1972 「天草地方の始原文化の一侧面」『熊本史学』40
- 熊本大学文学部考古学研究室 1981 「カミノハナ古墳群」研究活動報告11
- 熊本大学文学部考古学研究室 1982 「カミノハナ古墳群2」研究活動報告14
- 本渡市史編さん委員会 1990 「本渡市史」
- 松島町史編纂委員会 1990 「松島町史」



写真19 前島遺跡遠景(西より)



写真20 梅殿塚古墳(南より)



写真21 I区全景(東より)

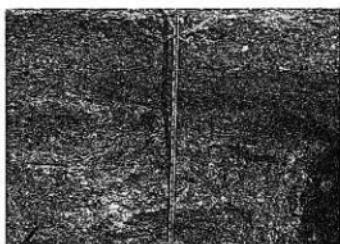


写真22 I区土層断面(西より)



写真23 II区全景(北西より)



写真24 III区混貝土層検出状況(北より)

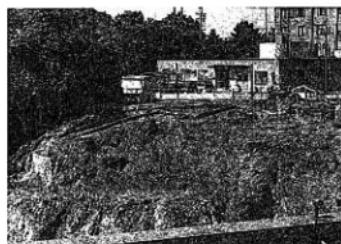


写真25 III区全景(東より)



写真26 III区全景(北より)

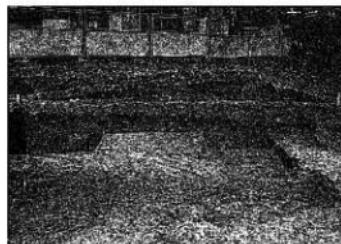


写真27 B-2・3区土層断面(南西より)



写真28 B-2区遺物出土状況(南西より)

第4章 本荘地区の調査（9511）

1. 調査の経緯

医学部再開発計画に基づき、医学部校舎中庭（駐車場として使用）にR I 総合センター遺伝子実験施設の建設が1995年度より開始されることとなった。施設部よりこの旨の報告があり、埋蔵文化財の調査の必要か否かの打診があった。これを受けて埋蔵文化財調査室では、遺跡周辺部でもあり、その存在が予想されるため試掘調査が必要であると判断し、その旨を伝え、両者で協議した。

調査室では、理学部臨海実験所内の発掘調査中であり、その終了をまって試掘調査を行うこととなった。1995年11月6日～同年11月8日にかけて2日間試掘調査を実施した。その結果、地表下1.3mに奈良時代～平安時代前半期の遺物包含層とその下に堅穴住居址を中心とする遺構が存在することが判明した。これを受けて、1995年11月27日に調査委員会三者会議を開き、本調査を実施することとなった。先行して樹木伐採および移転、排水管切り替え工事に伴い、立会調査を実施した。後の調査経緯に関しては、以下のとおりである。

<調査期間>

- 1995年11月24日 排水管切り替え工事立会調査（9511）
- 1995年12月1日 排水管切り替え工事立会調査（9511）
- 1995年12月4日 樹木移植工事立会調査（9517）
- 1995年12月25日～1996年2月22日 発掘調査（9511）

<調査参加者>

調査員：小畠弘己、作業員：飯田考俊、今村佳子、岩谷史記、大坪志子、岡村久美子、押方富江、甲斐美紀代、甲斐田末男、窪田千代子、古賀敬子、小細工洋子、柴田やよい、白石美智子、田中大介、土田ちえみ、橋本キヨカ、林田恵子、原田範昭、番山明子、福田久美子、藤岡泰江、堀川貞子、本田浩二郎、松井昭子、松浦一之介、水上順子、森田ミドリ、若杉竜太

<調査協力者>

松本健朗、高木正文、長谷部善一（熊本県教育庁）、稻津暢洋（熊本市教育委員会）

2. 遺跡の立地

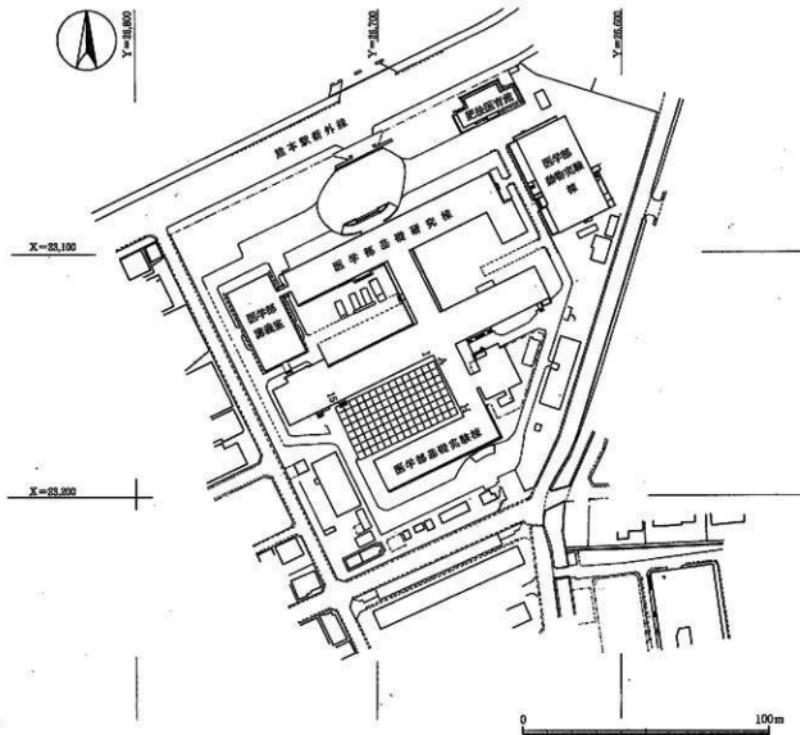
本庄遺跡は、熊本市文化財地図No 8-95の熊大病院敷地遺跡（本庄遺跡）として周知されている遺跡である。白川の左岸の沖積地にある。標高は12mである。上流には、奈良～平安時代の集落址である大江遺跡群が所在する（第1図）

3. 調査結果

基本層序（第33図）

堆積土壤および性質については、同じ白川の右岸にある黒髪町遺跡（黒髪南地区）によく似た様相を示している。表層は近・現代の搅乱層である。淡茶褐色土層は、近世～明治時代の遺物を含んでいる。その下に堆積する暗褐色土層は、厚さ30cmあまりで、奈良～平安時代の遺物を多く含み、繩文時代後期後半から晩期初頭の土器および石器若干を含んでいる。大江遺跡群では、この繩文時代の包含層は単層として分層可能であるが、本調査地点では分離できなかった。この遺物包含層（第3層）中およびその下の4層面で遺構を検出した。

第4章 本庄地区の調査



第31図 9511調査地点位置図 (1/2000)



写真29 調査区東部全景（西より）

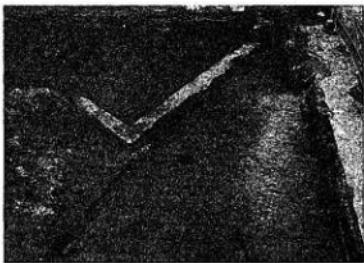
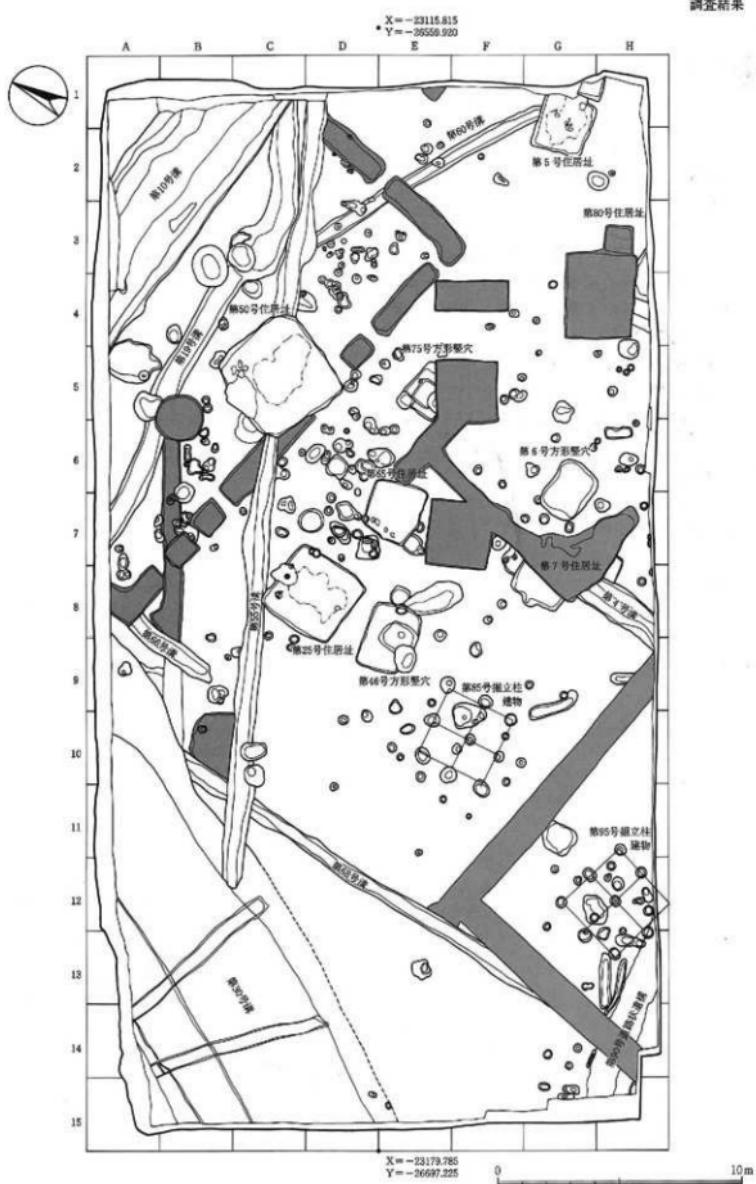


写真30 調査区西部全景（北西より）



第32図 9511調査地点構造配置実測図 (1/200)
(図中アミは探査)

検出遺構と出土遺物

今回の調査区（954m²）では、戦国時代～近世の濠2条、近世土塹6基、奈良～平安時代前半の竪穴住居址5基、方形竪穴遺構4基、同期溝3条、古墳時代後期溝1条を検出した（第32図）。遺物包含層からは、D-6区において縄文時代後期の石皿や磨石、土器片が集中する箇所もあり、遺構の存在した可能性もある。

<溝>

第30号溝

調査区の北西隅を北東～南西方向に走る幅8mあまりの溝である。本来は幅10m以上であったと考えられる。深さは検出面で1mあまりである。西側に幅2.5mあまりの一段深い部分があり、ここから大型の獸の骨などが出土した。掘り込みは基盤の砂岩層まで達している。近世初期の遺物を含む。

第10号溝（第34図1）

第10号溝は調査区の北東部、A～C-1～3区で検出した幅7m、深さ1.5mの断面形逆台形の溝である。基底部は岩盤の砂岩層まで達している。溝の肩部はゆるやかに立ち上がり、その変換点には浅い幅30cm、深さ5cmあまりの溝がある。下部は水の流れた痕跡が認められ、その部分から馬の歯や骨が数点出土した。古代の遺物が主体で、掘削時期を示す資料は少ないが、青磁片や瓦質の火舎片などから、16世紀後半の掘削と考えられる。また、北宋銭「熙寧元寶（初鑄1168年）」（第36図7）が出土している。

第4号溝

H-8区で検出した断面レンズ状の浅い溝である。幅1.4m、深さ40cmほどである。擾乱によって破壊され、溝の行方は不明である。近世以降の時期であろう。

第19号溝（第34図2）

C-1区からA-7区にかけて流れる幅1.2m、深さ80cmの断面逆台形の溝である。C-3区においてわずかに南へ蛇行するが、この部分において基底に20cmあまりの段差が認められる。第55号溝を切る。

第55号溝（第34図2）

C-3区からほぼまっすぐに南西方向へ伸びる溝である。端部は第30号溝の掘削によって破壊されており、その延長部の方向は不明である。現状で32mあまりを確認した。形状は幅75～100cm、深さ60cmあまりの逆台形を呈する。基底部と下から30cmの部分に鉄分の沈殿硬化した厚さ2cmほどの赤黒層が認められ、2時期の水の流れがあったことが窺える。この硬化層はかなり硬く、通常の水路として機能していたとは考え難い。最終的には砂岩や泥岩などの小礫を含む白黄色の土で埋められている。出土遺物は少なく、土師器片が少量出土している。

第60号溝

G-1区からD-3区にある東南～北西方向の溝である。幅50cm、深さ10cmほどの断面形U字形の浅い溝である。覆土は黒色のやわらかい土である。第5号住居址および第55溝に切られる。

第68号溝

ほぼ南北方向に走る幅50cm、深さ60cmあまりの断面形逆台形の溝である。覆土は單一で黒色の硬く締まった土である。土師器の壺形土器の破片が少量出土している。D-11区の検出した面より10cmほど上部で須恵器坏身（第36図14）が出土しており、切り合ひからみても、本遺跡の最古期に属することから、この坏が示す6世紀後半がこの溝の掘削時期と考えられる。

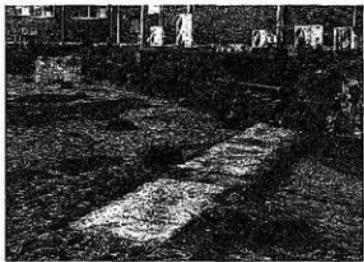
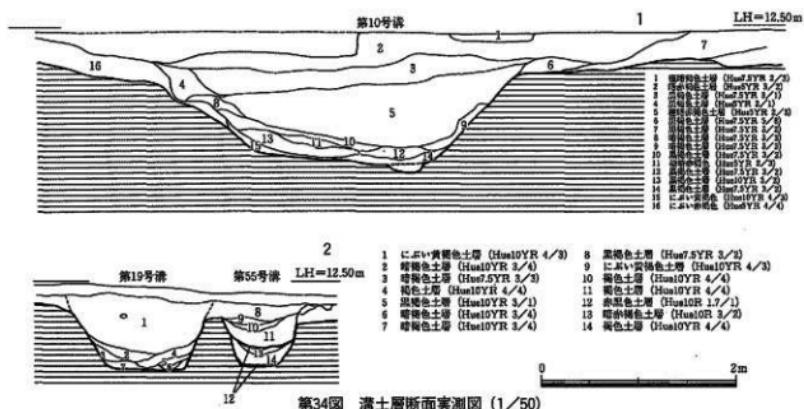
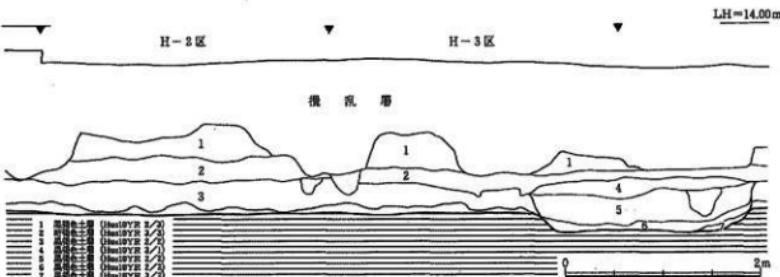


写真31 調査区南壁（西より）



写真32 土層断面 (H-1-3区) (北西より)

<道路状遺構>

調査区南西隅で検出した幅1.4mほどの道路状の遺構である。黒色土下に黒褐色の硬い面が認められる。方向はほぼ東西方向である。道路面除去後に北辺に幅20cm、深さ5cmほどの溝を部分的ではあるが検出した。第95号掘立柱建物の柱穴の一つがこの遺構の下に検出され、第95号掘立柱建物より新しい時期であることがわかる。竪穴住居群と同じく近接した時期と考えられる。

<竪穴住居址>

第50号住居址（第35図1）

C-D-4・5区で検出した長辺4.1m、短辺4.05m、深さ30cmあまりの竪穴住居址である。北西辺の中央に造り付けの竈をもつ。竈は破壊されており、竈東側に砂岩ブロックと粘土混じりの土が堆積していた。竈前面から対面方向にむけて幅1.5mほどの床の硬化した面が認められた。柱穴は竈両脇に検出した2つの穴以外は、整然とした配置をもつものはなかった。出土遺物としては住居北隅と竈周辺の床上から変形土器の破片が、南東隅の覆土上面から須恵器高坏の脚部が出土した。本調査区で最も大きな竪穴住居址である。第55号溝を切っており、床面下に溝の覆土が認められる。

第25号住居址（第35図2・3）

C-D-7・8区で検出した長辺3.3m、短辺3.2m、深さ30cmの隅丸方形の竪穴住居址である。覆土の上部には土師器の変形土器や瓶などが多量に投棄されていた（第35図2）。断面図をみると北西隅から投棄されており、住居址の中心部に向かってわずかに傾斜している。住居の断面図からみて、レンズ状に窪みとして残っていた住居に投棄したことがわかる。

本住居の竈は北辺の中央部に設けられており、残りが良好であった。竈上部は潰れた状態であったが、竈の主体はほとんど壊されておらず、変形土器（第37図23）を支脚にのせたまま残存していた。また、竈の両脇には完形の変形土器（第37図22）と潰れた状態の瓶（第37図24）が各1点残存していた。これは、他の住居址の竈がほとんど壊され、土器も破壊されるか持ち去られているとの対照的である。竈の焚口部分に竈の天井部の粘土が崩落していた。両袖の先端には角柱形の砂岩製支柱が深さ20cmほど地中に埋めこまれていた。竈袖の奥からは刀子状の鉄器やU字形の不明鉄器が出土した。竈構築の祭祀に関わるものであろう。

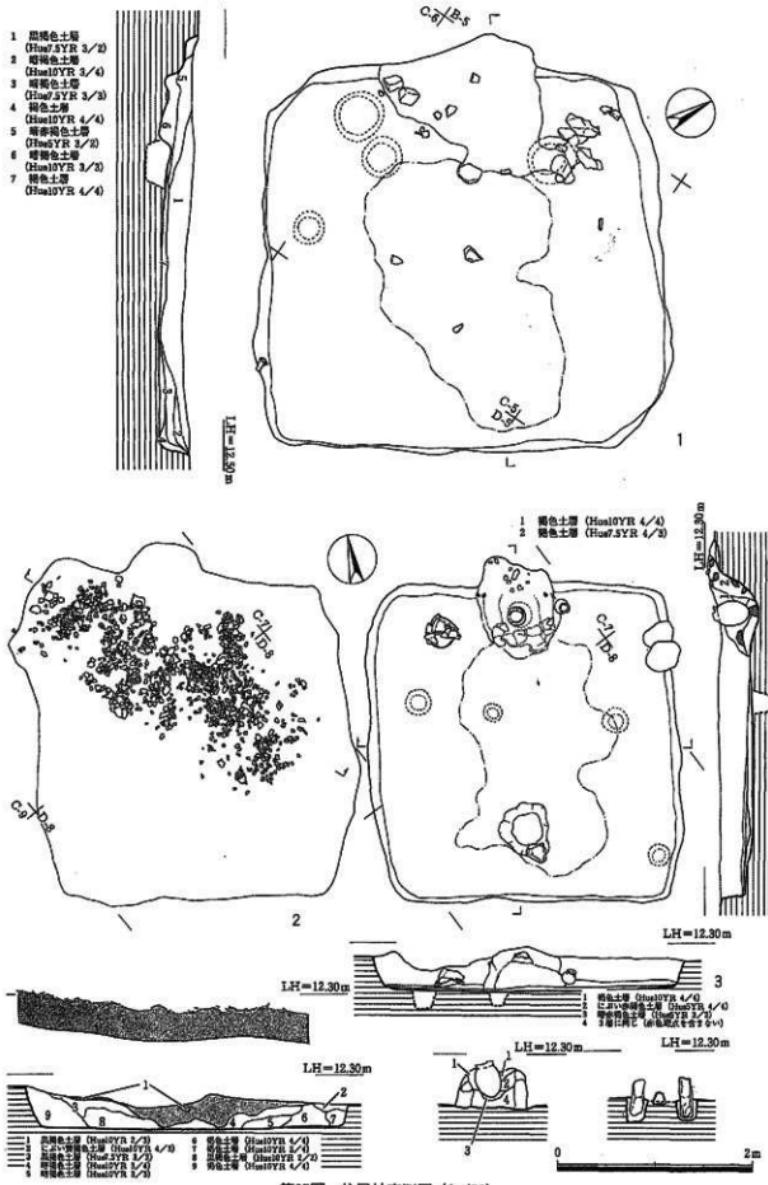
竈前面から対面の南辺に向けて幅1.6mほどの床の硬化した面が認められた。その端には20cm角の方形の砾石が埋めこまれ、その上面は擦れて皿状になっていた。また、その北側には直径40cm、深さ5cmほどの窪みが石砾で埋められた。これは、出入り口の踏み石とその前面にできた窪みと考えられ、竈の対面に入り口を想定できる。

第5号住居址（第38図1）

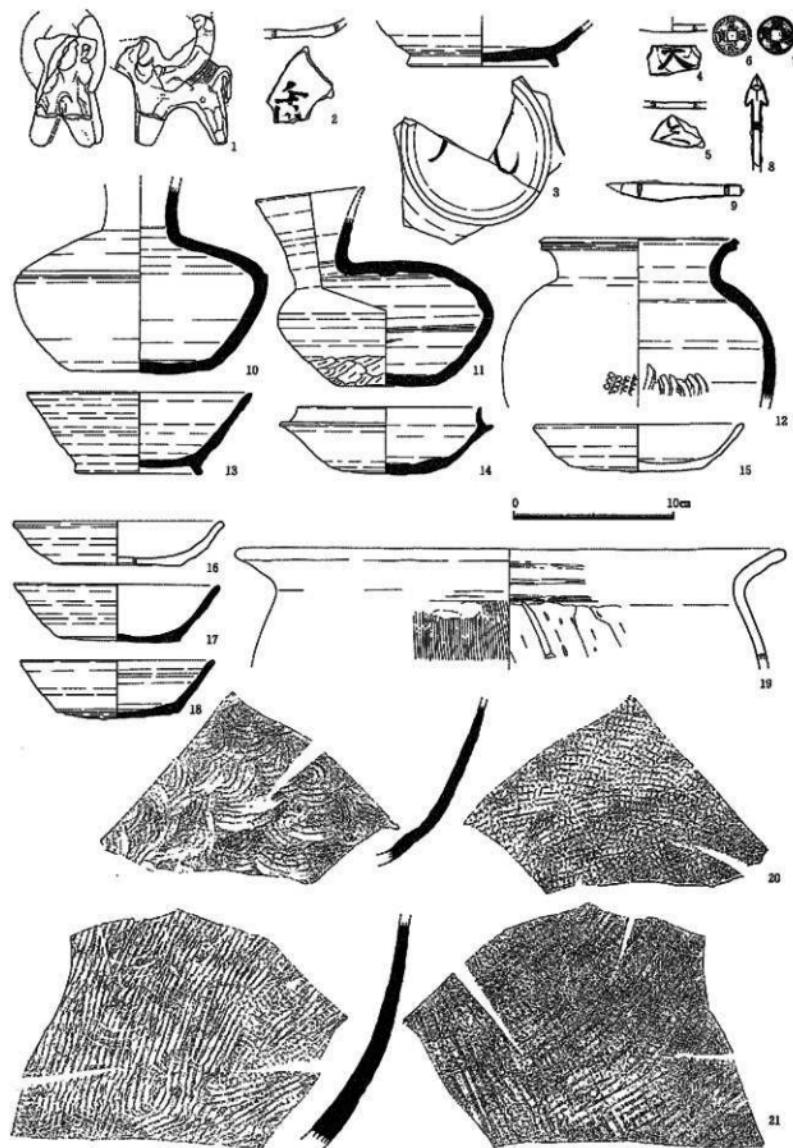
G-1-2区で検出した長辺2.4m、短辺2.2m、深さ32cmの竪穴住居址である。東辺中央に竈をもつ。竈は焚き口に若干の焼土層と焼けた面を残すのみで、上部の構築部は破壊されていた。住居中央に砂岩ブロック数個と磨石状の丸い砾、上面が皿状に擦れた扁平砾各1点が投棄してあった。また、竈右の覆土上面にも大きな砂岩の板石が1点廃棄されていた。住居中央を中心として床の硬化が認められた。柱穴は検出できなかった。覆土中から須恵器片や土師器片が若干出土している。うち判読不明であるが底部外面に墨書きをもつ土師器片（第36図5）がある。

第65号住居址（第38図2）

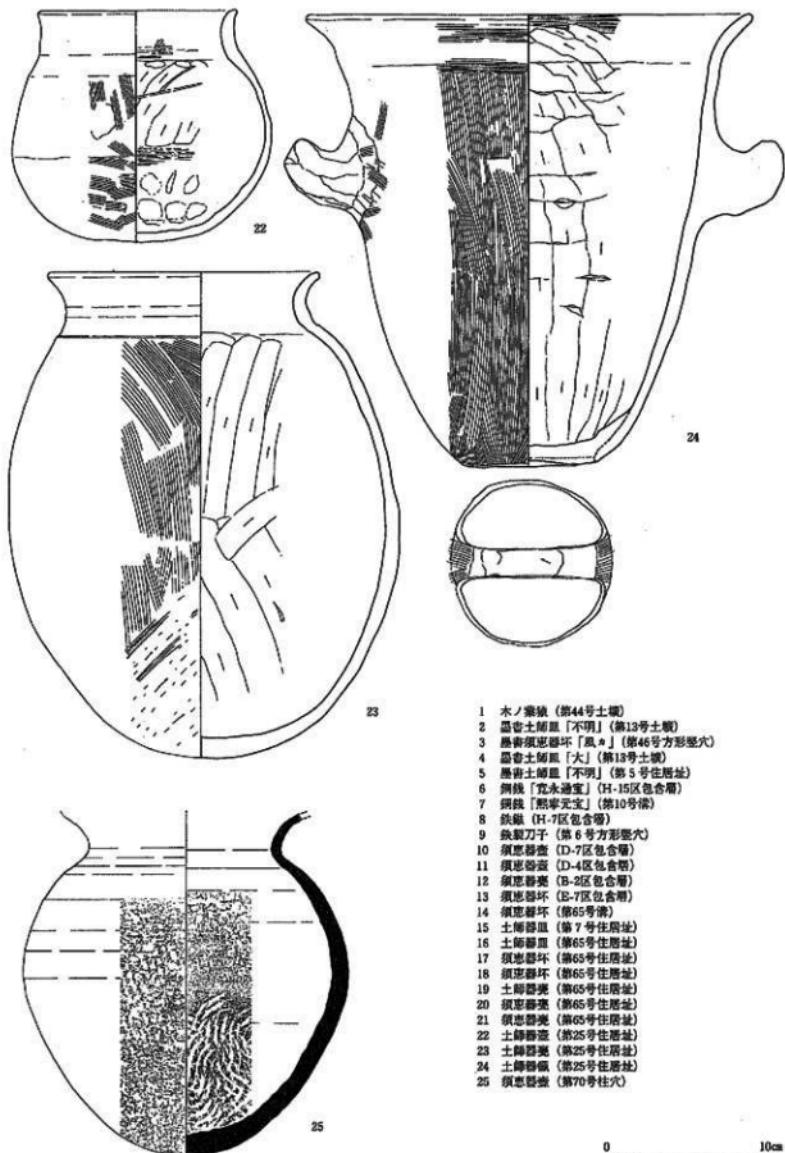
E-6・7区で検出したやや不整形な長方形の竪穴住居址である。長辺2.4m、短辺2.3m、深さ10~20cmである。西辺中央に竈の痕跡を残す。竈には2本の砂岩の角柱形の支柱が残っ



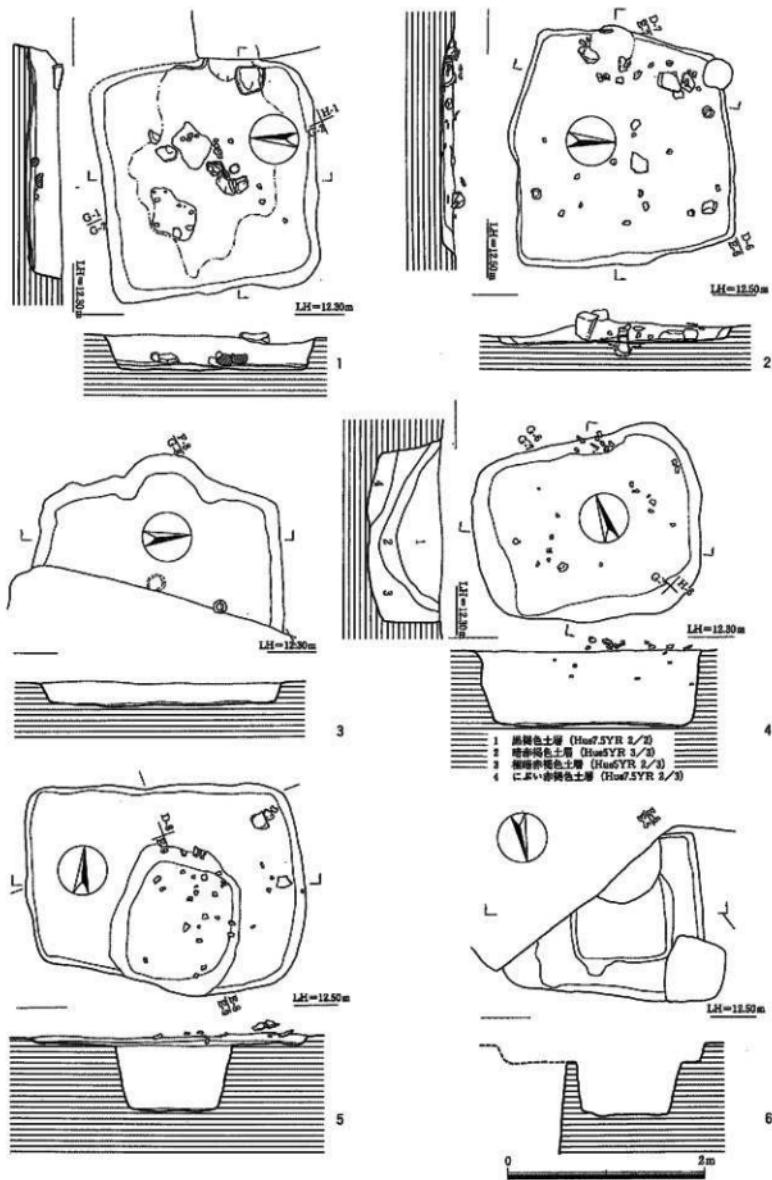
第35図 住居址実測図 (1/50)



第36図 包含層・各遺構出土の古墳～近代遺物実測図(1) (1/3)



第37図 包含層・各遺構出土の古墳～近代遺物実測図(2) (1/3)



第38図 住居址・方形竪穴遺構実測図 (1/50)

ており、右側の1点は10cmほど床面から掘り込まれた穴に据えられていた。その右側には砂岩ブロック2点が倒壊した状態で廃棄されており、その下から土師器壺の破片が出土した。竈本体部は焼けてわずかに赤く変色していた。遺物（第36図16・19～21）は破片になって床面全体から散漫に出土するが、須恵器の壺2点（第36図17・18）はほぼ完形であった。

第7号住居址（第38図3）

G-7・8区で検出した竪穴住居址である。大半を現代の攪乱に破壊されるため、全形は不明である。残存部の辺の長さは2.6m、深さは25cmである。覆土上面から砂岩ブロック1点、床面直上から土師器皿1点（第36図15）が出土した。竈や柱穴の位置は不明である。西辺に竈らしい張り出しあるが、竈とは確定できない。しかし、東西方向に竈が存在した可能性は高い。

第80号住居址

H-3・4区で検出した竪穴住居址である。そのほとんどが調査区外に存在し、西隅は現代の基礎により破壊されているので、規模については不明である。深さは検出面で20cmほどであるが、調査区南壁にあらわれた土層断面によると包含層（3層）を切り込んだ50cmほどの壁の立ち上がりを確認できる。

<方形竪穴遺構>

第6号方形竪穴（第38図4）

G-6・7区で検出した長さ2.4m、幅1.9m、深さ80cmの隅丸長方形の竪穴である。床面は硬い。他の遺構に比べてかなり深い。遺物は覆土上面から出土し、窪みに投棄されたものがほとんどである。床面近くから鉄製の刀子1点（第36図9）が出土した。

第46号方形竪穴（第38図5）

D-E-8・9区で検出した長さ2.9m、幅2.2m、深さ10cmの隅丸長方形の竪穴である。中央南北よりに1.5×1.3×0.7mの略長方形の竪穴がある。時期の異なる遺構とも考えたが、土層の堆積状況からは区別することはできなかった。遺物は主に覆土上面から出土する。そのうちの須恵器の高台付壺（第36図3）の底部に「風カ」の墨書きがある。

第75号方形竪穴（第38図6）

E-5区で検出した2.1m、幅1.8m、深さ20cmの隅丸長方形の方形竪穴である。略半分を攪乱に破壊されている。これも第46号方形竪穴と同じく中央部に1.0×0.8×0.6mの長方形の竪穴をもつ。

<掘立柱建物>

第85号掘立柱建物（写真48）

E-F-9・10区で検出した2×2間の総柱の掘立柱建物である。建物規模は3.2×3.0mほどで、柱間は柱穴の真芯で最短1.4m、最長1.75m、平均1.5mである。柱穴は直径70cm、深さ50cmである。やや柱筋とのおらない辺もある。柱痕跡は検出できなかった。

第95号掘立柱建物（写真49）

G-H-11～13区で検出した2×2間の総柱の掘立柱建物である。柱穴の一つは調査区外にあり、未検出である。想定される建物規模は3.2×3.0mほどで、第85号掘立柱建物と同規模である。柱間は柱穴の真芯で最短1.3m、最長2.0m、平均1.58mである。柱穴は直径50～60cm、深さ55cmである。やはり、柱筋とのおらない辺もあり、方向がやや東に振れる以外は第85号掘立柱建物ときわめてよく似た規模と構造をもつ。柱痕跡は検出できなかった。

<その他の遺構>

第70号遺構



写真33 第10号溝 (東より)



写真34 第19号・55号溝切り合い状況 (北東より)

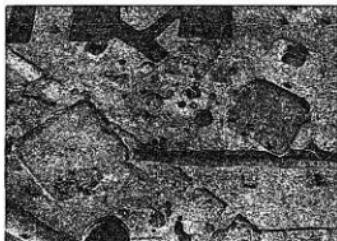


写真35 第25・50・65号住居址 (北西より)

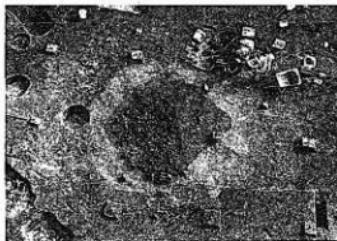


写真36 第25号住居址と覆土陶土器 (北西より)



写真37 第25号住居址陶土器詳細(1) (東より)



写真38 第25号住居址陶土器詳細(2) (東より)



写真39 第25号住居址竈と周囲の土器 (南より)



写真40 第25号住居址竈 (南より)



写真41 第25号住居址概出土状況（南より）



写真42 第5号住居址（西より）



写真43 第65号住居址（東より）



写真44 第7号住居址（南より）



写真45 第6号方形竪穴造構（北より）

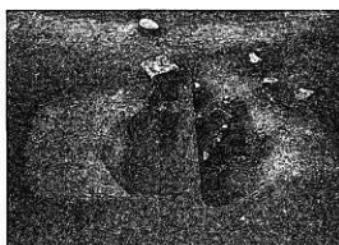


写真46 第46号方形竪穴造構（南より）



写真47 第75号方形竪穴造構（西より）

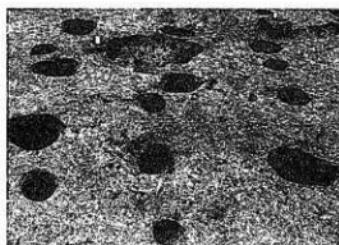


写真48 第85号掘立柱建物（西より）

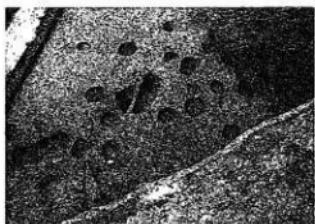


写真49 第95号掘立柱建物（南東より）



写真50 調査風景（西より）



写真51 繩文土器出土状況（北より）



写真52 石皿・磨石出土状況（南より）

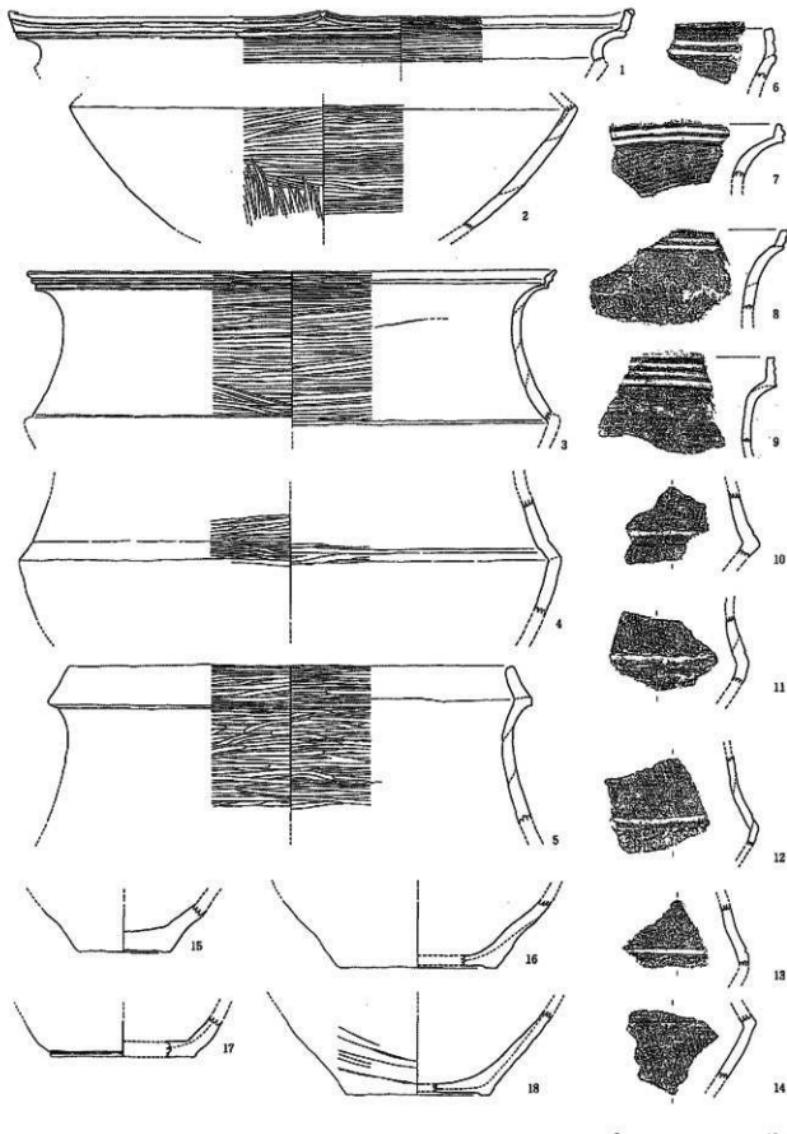
B-9区で検出した遺構である。上部に口縁部を欠いた完形に近い須恵器の壺1点（第37図25）が据えてあった。壺の外面は風化が著しく、器面が剥落する部分もある。壺の下には直径60cm、深さ50cmほどの柱穴があり、柱の抜き痕に壺を置いたものと考えられる。しかし、建物の廃棄に伴う祭祀跡としてもそれに付随する建物はこの地点には存在しない。意味不明の遺構である。

これによく似た完形に近い須恵器を置いたものは、A-7区（第36図10）やD-4区（第36図11）でも認められ、包含層の破片になった個体とは性格がまったく異なることから、何らかの埋置行為の結果であろうが、残念ながら明確な遺構に伴って検出することはできなかつた。

その他の出土遺物

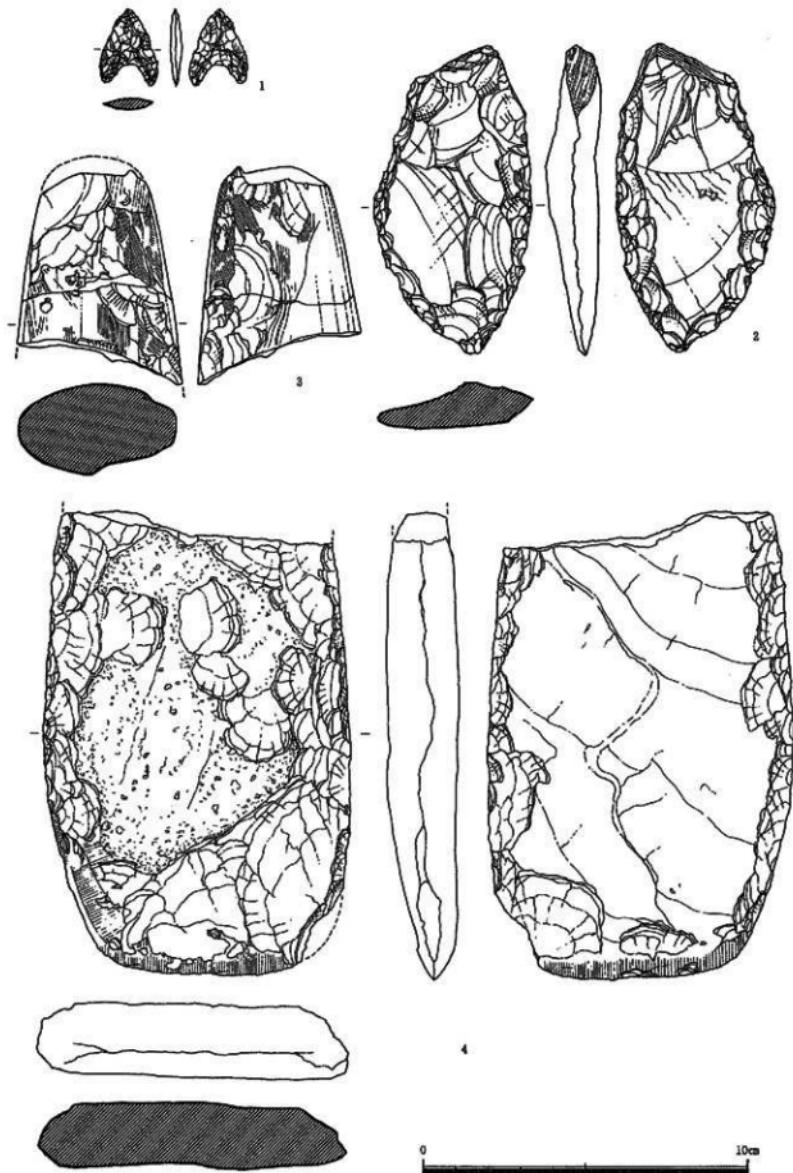
今回の調査では、上述した遺構や包含層から多量の遺物が出土した。その主体を成すのは須恵器や土師器を中心とする古代の各種土器である。調査終了後間もなく、ほとんどが未整理であるのでここではその一部について紹介しておく。第36図1は第44号土壙から出土した木の業穢である。近世以降の所産であろう。第36図6は「寛永通寶（初鋲1636年）」である。第36図2・4は第13号土壙（近世）から出土した墨書き土器（「不明」、「大」）である。第36図8は鉄鎌である。基部を欠損する。第36図13は完形に近い須恵器高台付壺である。第65号住居に近接して出土した。第36図12は須恵器の壺形土器の口縁部の破片である。

これ以外に、包含層より100点ほどの繩文後期後半～晩期初頭の土器（第39図）や石器（第40・41図）が出土している。土器のほとんどは御領式土器の深鉢や浅鉢の破片であるが、天城式土器片も一部含まれている（第39図5）。石器としては、サヌカイト製石鎌（第40図1）、同スクレイバー（第40図2）、砂岩製石斧頭部（第40図3）、多孔質安山岩製刃部磨製石斧（第40図4）、砂岩製石皿（第41図5）、同磨石（第41図6）などがある。

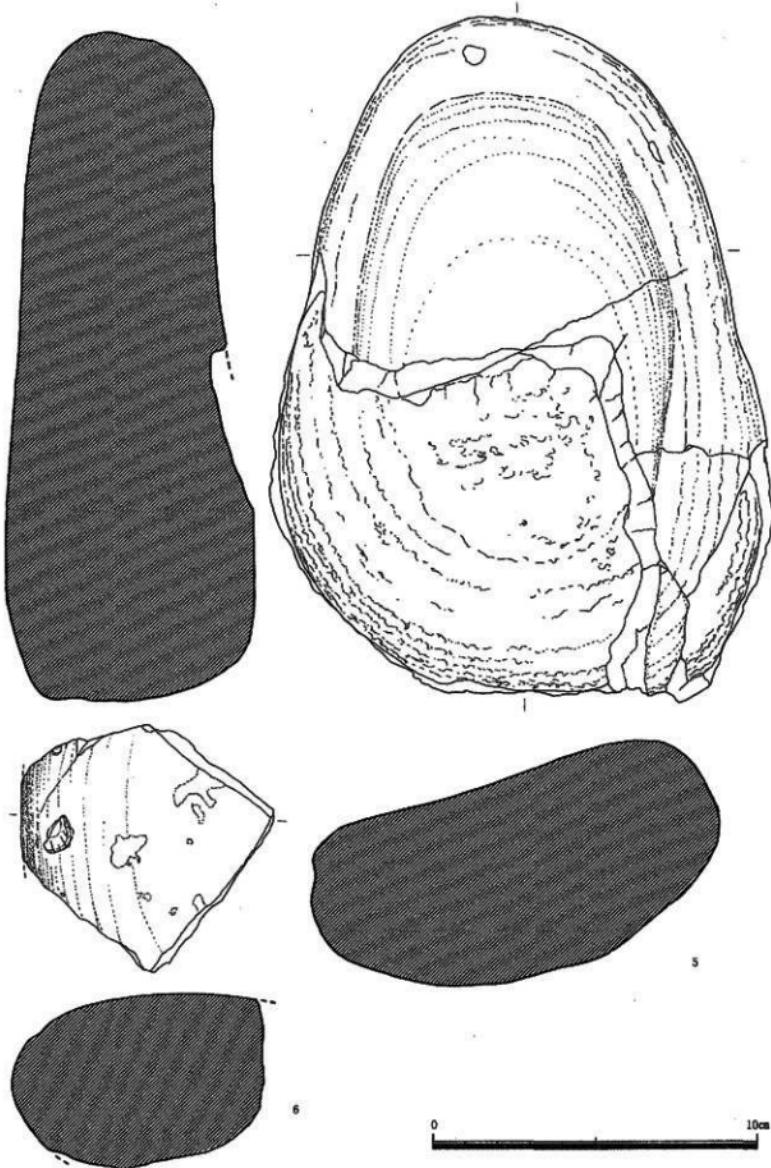


第39図 包含層出土縄文土器実測図 (1/3)

0 10cm



第40図 包含層出土縄文時代石器実測図(1) (2/3)



第41図 包含層出土縄文時代石器実測図(2) (2/3)

4. まとめ

今回の調査では、これまであまり内容の知られていなかった本荘遺跡の性格の一端を明らかにすることができた。本調査区においてもっとも古い遺物は、縄文時代後期後半のものである。該期の遺物は包含層からの出土がほとんどで、明確な遺構は伴っていない。しかし、石皿や磨石などが近接して出土する地点もあり、生活址の痕跡がわずかながら認められる。この地点では、古代の包含層と縄文時代の包含層を区別することはできなかったが、周辺部において、両層の分離と明確な遺構を発見することが今後の課題であろう。

古墳時代後期から古代にかけての遺構が、本調査区での検出遺構の主体をなすものである。調査終了後間もないこともあって、出土遺物の詳細な検討を行っていないので、遺構の切り合いから、その前後関係について概略を述べる。最も古い遺構は、第68号溝および第13号溝である（Ⅰ期）。次の時期に属するのが、第55号溝である（Ⅱ期）。次に第25号住居址と第50号住居址で、他の住居址および方形竪穴遺構もこの時期に属する。第19号溝および第90号道路状遺構もこの時期もしくはそれ以降に属する可能性が高い。この時期の遺構は、8世紀後半から9世紀前半のかなり長期にわたる。住居址の方向や規模から第25号と第55号住居址とその他の住居址の2時期もしくはそれ以上に細分ができるようである。第85号および第95号掘立柱建物は上記遺構と方向や覆土の特徴が類似することから、このⅠ期もしくはⅡ期の前半に属する可能性が高い。これ以降、中世末期にいたるまで本調査区は生活の痕跡を留めていない。集落としての繁栄と廃絶される時期が、みごとに大江遺跡群に展開した古代集落と一致している。この原因として、国府移転に伴う集落の廃絶が窺え、この集落の村人が国府に出司していた下級役人であった可能性を示している。これは、わずかながら出土する墨書き器片が傍証となろう。次にこの地に生活の痕跡が認められるのは、第10号溝に代表されるようにな16世紀後半になってからである（Ⅲ期）。しかし、近世の大溝にも認められるように生活痕跡は溝などの深い遺構に限られる。近代以降の削平によるものなのか、集落の中心をはずれた周辺部の状況を示すものなのか、今後の調査の成果を待ちたい。

【参考文献】

- 大江青葉遺跡調査団 1976 「大江青葉遺跡」
- 熊本市教育委員会 1982 「大江東原遺跡」
- 郵政省九州郵政局 1986 「大江東原遺跡」
- 熊本市教育委員会 1989 「大江遺跡群Ⅰ」
- 熊本市教育委員会 1993 「大江遺跡群Ⅱ」
- 熊本大学埋蔵文化財調査室 1994 『熊本大学埋蔵文化財調査室年報』第1集

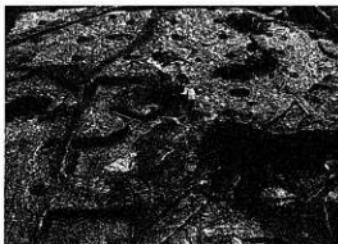


写真53 冠雪の現場（東南より）

第5章 跋文

熊本大学埋蔵文化財調査室は発足2年目を追え、差し迫った工事が竹出することから、福岡市埋蔵文化財センターで活躍中の小畠弘己氏を助教授に招聘して、調査体制の充実が図られた。本文に記す通り本年度は本格調査5件、立会調査19件、試掘調査5件を済ませ、ここによく報告書を刊行する運びになった。天草松島地区の理学部附属臨海実験所の調査ではこの地域では初めての発見である縄文時代早期の遺構や遺物が明らかとなり、本荘地区的医学部校舎新築地では古墳時代から奈良時代の集落の検出がなされ、黒髪地区的工学部敷地では昨年度の調査区隣接地で発掘の結果、集落の範囲の広がりを捉えることができたなどは、貴重な歴史資料として今後脚光を浴びることになろう。

医学部の校舎新築に伴う発掘調査が2月下旬まで続いたために、1月・2月は昼間の発掘を終えた後に、深夜まで整理作業と報告書の作成にあたり、しかも土曜・日曜・祭日返上で辛うじて報告書提出期日に間に合わせるという離業で切り抜けることができたのは、小畠氏の獅子奮迅の働きによるものであるが、このような状況が常態となることは避けなければならない。発掘調査においては予想外の遺構の検出があつても、ほぼ予定通りに終了したことから、こうした切羽詰まった状況をもたらしたことの主たる原因是、調査自体にあるのではないことは明らかであり、当初の計画から調査開始が大幅に遅れたことに求めなければならないであろう。そのために一方では、調査に当たる作業員や発掘調査を補助する大学院生の確保に重大な支障を来すことにもなり、円滑な行動がとれなかつたのは非常に残念であった。

来年度は工学部と医学部の新築工事が予定されており、この2ヶ所の調査のために、他の調査は早くても秋半ば以降にならないと対処できないし、1月以降は調査報告書の作成のために、現状の調査体制では時間的余裕がないことは明確である。早急な対応策の検討が望まれる。

熊本大学埋蔵文化財調査室長 甲元眞之

付篇 熊本大学構内埋蔵文化財保護対策要項

1. 熊本大学埋蔵文化財調査委員会規則

(設 置)

第1条 熊本大学（熊本大学医療技術短期大学部を含む。以下「本学」という。）に、熊本大学埋蔵文化財調査委員会（以下「委員会」という。）を置く。

(任 務)

第2条 委員会は、本学の施設整備に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する重要事項を調査審議する。

(組 織)

第3条 委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

（1）各学部、教養部、医学部附属病院及び医療技術短期大学部から選出された教授又は助教授 各1人

（2）大学院自然科学研究科長

（3）附属図書館長

（4）学生部長

（5）事務局長

（6）埋蔵文化財調査室長

（7）その他委員会が必要と認めた者 若干人

2 前項第1号及び第7号の委員は、学長が委嘱する。

(任 期)

第4条 前条第1項第1号及び第7号の委員の任期は2年とし、再任は妨げない。

2 前項の規定にかかわらず、前条第1項第1号及び第7号の委員に欠員を生じた場合の補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(委員長)

第5条 委員会に委員長を置き、委員の互選によって定める。

2 委員長は、委員会を招集し、その議長となる。

3 委員長に事故があるときは、委員長があらかじめ指名する委員がその職務を代行する。

(議 事)

第6条 委員会は、委員の過半数が出席しなければ議事を開き、議決をすることができない。

2 委員会の議事は、出席した委員の過半数をもって決し、可否同数のときは、議長の決するところによる。

(意見の聴取)

第7条 委員長は、必要があるときは、委員以外の者を出席させ意見を聞くことができる。

(調査室)

第8条 委員会に、埋蔵文化財の発掘調査に関する業務を行うため、埋蔵文化財調査室（以下「調査室」という。）を置く。

2 調査室の業務、組織その他必要な事項については、別に定める。

(事 務)

第9条 委員会の事務は、経理部主計課において処理する。

(総 則)

第10条 この規則が定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会が定める。

附 則

1 この規則は、平成6年4月7日から施行する。

2 この規則施行後、最初に委嘱される第3条第1項第1号及び第7号の委員の任期は、第4条第1項の規定にかかわらず、平成8年3月31日までとする。

2. 熊本大学埋蔵文化財調査室要項

(趣 旨)

第1条 この要項は、熊本大学埋蔵文化財調査委員会規則第8条第2項の規定に基づき、熊本大学埋蔵文化財調査室（以下「調査室」という。）の業務、組織その他必要な事項について定める。

(業 務)

第2条 調査室は、熊本大学（熊本大学医療技術短期大学部を含む。以下「本学」という。）の施設整備に伴う埋蔵文化財の発掘調査に関する次の業務を行う。

（1）実施計画の立案及び実施に関すること。

（2）出土した埋蔵文化財の整理、保管及び保存に関すること。

（3）文化庁等に提出する報告書の作成に関すること。

（4）その他必要な事項

(組 織)

第3条 調査室に、室長を置く。

2 室長は、調査室に関する業務を掌理する。

3 調査室に調査員その他必要な職員を置くことができる。

4 調査員は、発掘調査に関する業務を行う。

(室長等の任命)

第4条 室長及び調査員は、本学の教官のうちから学長が任命する。

2 学長は、必要がある場合は、学外の者を調査員に委嘱することができる。

(事 務)

第5条 調査室の事務は、関係学部等の協力を得て、経理部主計課において処理する。

(総 則)

第6条 この要項に定めるもののほか、調査室の運営に必要な事項は、熊本大学埋蔵文化財調査委員会が定める。

附 則

この要項は、平成6年4月7日から実施する。

3. 1995年度熊本大学埋蔵文化財保護対策組織

1 埋蔵文化財調査室組織（平成7年4月1日現在）

＜室長＞ (併・文学部教授) 甲元 真之

＜調査員＞ (併・文学部助教授) 小畠 弘己

＜事務補佐員＞ 矢野 希久代

＜室内作業員＞ (11-12月) 古賀 敬子

藤岡 泰江

2 埋蔵文化財調査委員会

委員長	北野 隆 (熊本大学工学部教授)	任期 (1994.5.16～1996.3.31)
委員	松本寿三郎 (文学部教授)	(1994.5.16～1996.3.31)
	森山恒雄 (教育学部教授)	(1994.5.16～1996.3.31)
	岩岡中正 (法学部教授)	(1995.3.20～1996.3.31)
	岩崎泰顯 (理学部教授)	(1994.5.16～1995.3.31)
	小川 尚 (医学部教授)	(1995.4.1～1996.3.31)
	庄司省三 (楽学部教授)	(1994.5.16～1996.3.31)
	猪飼隆明 (教養部教授)	(1994.5.16～1996.3.31)
	土龟直俊 (附属病院助教授)	(1994.5.16～1996.3.31)
	葛川忠久 (医技短大部教授)	(1994.5.16～1996.3.31)
	柏木 潤 (大学院自然科学研究科長)	(1994.5.16～1996.3.31)
	植村啓治郎 (附属図書館長)	(1994.5.16～1995.5.15)
	金原 理 (附属図書館長)	(1995.5.15～1997.5.15)
	江端正直 (学生部長)	(1994.10.1～1996.9.30)
	占部道敏 (事務局長)	(1994.10.1～)
	甲元真之 (埋蔵文化財調査室長)	(1994.5.16～)

審議事項

1995年4月24日	1995年度の埋蔵文化財発掘調査について 埋蔵文化財調査室経費の要求について 教官定員流用の申請について
1995年7月7日 (第三者協議)	理学部附属臨海実験所研究実験棟改修工事に伴う埋蔵文化財発掘 調査について
1995年11月27日 (第三者協議)	本荘地区R I 総合センター・遺伝子実験施設建設予定地の埋蔵文 化財発掘調査について
1996年2月6日	1995年度の埋蔵文化財発掘調査結果について

報 告 書 抄 錄

ふりがな	くまもとだいがくまいぞうぶんかざいちょうさしつねんぽう2 -1995ねんび-							
書 名	熊本大学埋蔵文化財調査室年報2 -1995年度-							
副 書 名								
卷 次								
シリーズ名	熊本大学埋蔵文化財調査室年報							
シリーズ号	2							
編著者名	甲元眞之・小畠弘己							
編集機関	熊本大学埋蔵文化財調査室							
所 在 地	〒860 熊本県熊本市黒髪2-39-1 TEL.096-344-2111㈹ FAX.096-342-3150							
発行年月日	1996年3月31日							
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
くろかみまち 黒髪町遺跡	熊本県 熊本市 黒髪	43	201	32° 48' -40° _{60'}	130° 43' -40° _{60'}	19950425 19950331	3000m ²	学校敷地内の 開発事業に伴う
まえじま 前島貝塚	熊本県 天草郡 松島町 大字合津	43	522	32° 31' 19"	130° 25' 60"	19940908 19951012	298m ²	学校敷地内の 開発事業に伴う
ほんじょう 本庄遺跡	熊本県 熊本市 本荘	43	201	32° 47' 59"	130° 42' 77"	19951106 19960222	1000m ²	学校敷地内の 開発事業に伴う
所取遺跡名	種 別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
黒髪町遺跡	集落址	奈良・平安		竪穴住居址 溝状遺構 集石遺構	2 1 1	縄文後期土器 古代土師器 古代須恵器		
前島貝塚	集落址	縄 文		集石遺構	1	縄文早期土器 石器(石斧・石鎌等) 礫・貝		
本庄遺跡	集落址	奈良・平安		竪穴住居址 掘建柱建物 方形竪穴遺構 溝(濠)状遺構 道路状遺構 土壤	5 2 4 6 1 6	織文・縄文・礫 古代土師器 古代須恵器 鉄器		

熊本大学埋蔵文化財調査室年報2

-1995年度-

平成8年3月29日 印刷

平成8年3月29日 発行

編集兼発行者 熊本大学埋蔵文化財調査室
熊本市黒髪2-39-1
電話 (096) 344-2111
(内線3832)
印刷所 桜太陽社
熊本市新大江2丁目5番18号
電話 (096) 366-1251

